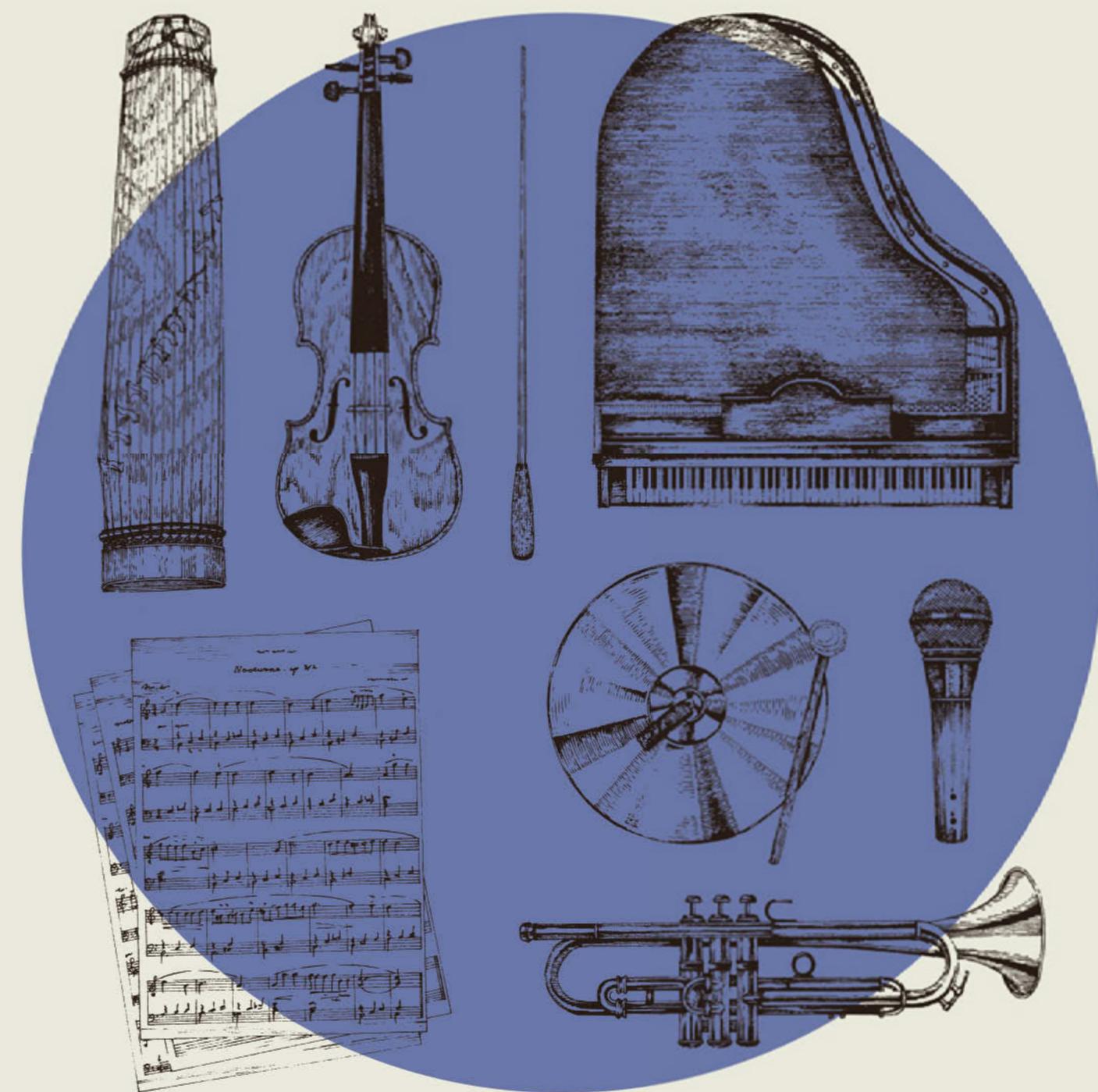


GEIDAI TSUSHIN



Tokyo University of the Arts [藝大通信]



廣利衆生諸比丘中
多有人名目捷軍夜

都世尊故名此日捷
軍夜都爲大日捷軍

夜都

余時偷軍尉又國有一婆羅門名曰迦葉
有三十二相恆明智
慧誦四比陀經一切
書論无不通達極大臣富善能布施其婦
端正舉國无雙二人
自然无有欲想乃至
亦不同宿一室久於
法首種善根故不樂
在家受五欲樂日夜
思惟厭離世間精勤
求訪出家之法如是
推尋不能得已即捨
家事入於山林心念
口言諸佛如來出家
脩道我今亦當隨佛
出家即便脫去金綷
賈直百千兩金壞色
納衣自剃鬚髮余時
迦葉自出家已而語
之言善男子甘邇種
植白淨王子其名薩
婆羅門家學直成



又復告言善哉迦葉
使哉迦葉當知五受
陰身是大苦聚于時

迦葉聞此言已即便
見諦乃至得於阿羅

漢果余時世尊昂與

迦葉俱還竹園以此

迦葉有大威德智慧

聰明是故名之爲大

迦葉





GEIDAI Gallery
Vol. 11

「絵因果經」

下段に「過去現在因果經」の経文を記し、上段にその物語に対応する場面を絵画化した奈良時代（8世紀）の絵巻。当時は中国からもたらされた原本をもとに、このような写経を盛んに行っており、絵、書とともに中國六朝時代の様式を示している。明治22年（1889）の東京美術学校開校にあたり、フェノロサと岡倉天心が中心となって美術教育の一級資料として購入しており、藝大コレクションの最初期のもののひとつである。（大学美術館蔵）



GEIDAI TSUSHIN 31 | 目次

2 GEIDAI Gallery Vol. 11 絵因果絆	22 Interview with a Graduate 卒業生に聞く 第10回 福嶋麻衣子
5 Special Feature: Super Global University 特集 ——スーパーグローバル大学へ——世界にはばたく藝大 渡邊健二	26 History of Geidai in Art and People 歴史を彩る人・作品 ——総合芸術アーカイブセンターの研究から 第2回 金次郎と尊徳—— 美校と二つの二宮像
12 Professor Interview 同志対談——教員は語る 第23回 土田英三郎 × 小鍛治邦隆	坂口英伸
16 Visiting the Laboratory Organ Studio 研究室探訪 Vol. 10 音楽学部器楽科オルガン専攻	29 Topics [2015.3–2016.2]
31 Student Interview 学生インタビュー Vol. 2 大谷陽一郎 黒岩航紀 斎藤円香	31 News [2015.2–2016.2]
30 編集後記	

藝大通信

No.31

GEIDAI TSUSHIN
東京藝術大学広報誌
藝大通信 第31号

・編集発行

東京藝術大学「藝大通信」編集部

・編集委員

松下 計（美術学部デザイン科教授・編集長）
八谷和彦（美術学部先端芸術表現科准教授）
吉田浩之（音楽学部声楽科教授）
鈴木純明（音楽学部作曲科准教授）
磯見俊裕（大学院映像研究科映画専攻教授）
大石 泰（演奏藝術センター准教授）

・アートディレクター

松下 計

・表紙デザイン

橋笠彰子

・表紙イラスト

三宅曜人

・撮影

坂口宏明

西村伊央（美術学部附属写真センター）

・制作

株式会社 平凡社

・発行日

平成28年3月25日

・お問い合わせ先

東京藝術大学総務課

〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8

電話 03-5525-2026

FAX 03-5685-7760

E-mail toiawase@ml.geidai.ac.jp

URL <http://www.geidai.ac.jp/>



ソフィア・ユニバーシティ
Sophia University - Super Global University

特集

スーパー・グローバル大学へ— 世界にはばたく藝大

二〇一四年に文部科学省は、日本の大学が国際競争力を高め、グローバルな人材を育成するための「スーパー・グローバル大学創成支援事業」を発表し、藝大が芸術系としては唯一採択されました。この「スーパー・グローバル大学」プロジェクトについて、渡邊健二理事のお話と、美術・音楽・映像の各分野での活動を紹介いたします。



[映像] フランス国立映画学校、韓国国立映画アカデミーの学生たちとの短編映画の共同制作で横浜をロケ撮影

藝大の スーパー・グローバル戦略

理事 渡邊健二

な軸にすえ、藝大を世界のトップブランドに飛躍させようという、斬新かつ大胆なプログラムです。

スープラーバル戦略

二〇一四年九月、文部科学省は、日本がこれからさらに発展し、世界で活躍できる力をつけていくために、大学の国際競争力を高め、グローバルな人材を育成する「スープラーバル大学創成支援事業」を発表し、二〇二三年度までの一〇年間に、一大学あたり数千万円から数億円の補助金を毎年支給することになりました。

この支援を受ける大学には、世界大学ランキングのトップ一〇〇を目指すトップ型のAタイプ一三校と、社会のグローバル化をリードしていく牽引型のBタイプ二四校、計三七校が採択されました。

藝大はBタイプで、芸術系としては唯一採択された大学です。藝大にしかできない「藝術文化」という独自のフィールドで世界の頂を極め、世界の藝術文化発展に尽くすことが、藝大の新たな使命として明確化されたわけです。

「スーパー・グローバル大学」プロジェクトで、藝大はどんな構想をもち、どのような展開をしていくのか、渡邊健二理事にうかがいました。

“藝大力”を活かして 世界のトップに

藝大が文部科学省に提出したスープラーバル大学構想のネーミングは、「『藝大力』創造イニシアティブ／オンラインのグローバル戦略」。以下の四つの戦略を基本的

1 Integration（統合・集積） 美術、音楽、映像の教育研究資源を総結集した「オール藝大」体制により、分野横断的・複合的な新たな藝術文化を創り出す。

2 Collaboration（共同・共演） 海外の一線級のアーティストユニットを誘致し、ジョイントディグリー（共同学位）などカリキュラム共同化によりグローバルな人材を育成する。

3 Development（展開・発展） 文化集積地である「上野の杜」を広域型キャンパスとして活用し、国際遊学都市へと展開。二〇二〇年東京オリンピック開催を契機に、上野の杜を国際的藝術文化都市へ発展させる。

4 Branding（価値・プレゼンス向上） まだ確立されていない世界の藝術系大学の国際指標や、相対的な強み・特色を、藝大が中核となつて、世界の有力藝術系大学と連携しつつ検証・分析し、グローバルなスタンダードを構築。世界への発信や国際的なプレゼンスを明確化して「藝大ブランド」を確立する。

文化の集積する上野という立地条件を最大限に生かし、藝大がコアとなつて、産官学をまとめた戦略を展開しようではないか、という目標のもと、外国人教員を増員し、日本と海外双方からの留学生を増やし、共同授業などのプロジェクトを開催、外国の提携大学とともに各種の試み、活動を展開していく一〇年計画です。

世界をリードしていく優れた人材を育成す



ることが第一の目的ですが、芸術家や研究者といった既存の枠組みにとどまらず、社会との関係性の中で文化を創つていける人間、より調和を持った世界を創つていけるような人間を育てていきたいのです。

このようなグローバル体制を円滑に進めていくため、二〇一四年に「国際企画課」と「グローバルサポートセンター」が設置され、海外留学を希望する学生や外国人留学生に対して、修学・生活指導に関する支援などをいつそう充実させています。

現在、美術ではパリ、ロンドン、シカゴの美術大学との共同カリキュラム、音楽ではイギリスやハンガリーの音楽大学との共通学位を目指した各種の試み、映像ではアジアとヨーロッパ、アメリカを結ぶ共同映画制作と、それぞれの分野で活発な取り組みが展開されています（具体的な活動については、別項をご覧ください）。

「グローバル」とは 新たな表現・文化の創造

もともと東京美術学校、東京音楽学校として藝大が創設されたときから、創作、演奏、研究などの活動は国内だけでなく、世界を舞台にしよう、というスタンスが伝統的なものとなっています。二〇一六年二月一八日現在、世界二三か国・地域の六三大学・機関と交流協定を結び、共同プロジェクトや、交換留学、短期研修などが盛んに行なわれています。

「スーパー・グローバル大学」戦略もそれを踏まえたものであり、国際的な取り組みをさらに拡大・強化し、「藝大力」を確固たるものにする絶好のチャンスといえるでしょう。これだけの情報社会になつた現在、どこに

いても知識は得られますが、実際にその土地を訪れ、文化、空気、人間にじかに触れ合ふことは、感覚や知覚、認識、創造力にとつて格別の作用をします。私自身もハンガリーのリスト音楽院に留学した経験があり、実感しているのですが、あるまとまった期間、同じ目的を持ってプロジェクトに参加することにより、非常に濃密な時間と空間が生まれてくるのです。

実際に海外の各国との合同プロジェクトが始まつてから、助走期間も含めて一年ほどですが、学生たちの目の色が変わってきています。レッスンにしても、日本と外国の先生と両方から教わりますから忙しくはなりますが、刺激も倍になります。今までになかった規模で、生き生きと活動が繰り広げられるようになりました。これは学内全体を大きく活性化するものとなっています。

プロジェクトに参加する学生たちは、互いに自国語ではなく、英語などの共通言語で意思疎通をすることになるので、最初はもどかしい面もありますが、一週間、二週間と経つうちに、互いにしゃべれるようになると、活気も出てくるし、プロジェクトは信じられないくらいうまく回り出します。

学生たちも妥協せずに、とことんぶつかり合いながら、互いの伝統や文化のオリジナリティを引き出して、新しい表現を作り出していく。知的な刺激に満ちた真剣勝負ですね。それが本来のグローバルのあり方ではないでしょうか。

渡邊健二（わたなべ・けんじ）
東京藝術大学理事

1954年愛知県出身。78年東京藝術大学大学院音楽研究科器楽専攻（ピアノ）修了。74年日本音楽コンクール第1位。78～83年ハンガリー、リスト音楽院留学。79年ミュンヘン国際音楽コンクール第3位。2004年東京藝術大学音楽学部教授、05年同大学理事・副学長。演奏活動の他、多くのピアノコンクールの審査員を務める。14年より現職。



右から【美術】シカゴ美術館附属美術大学との共同授業【音楽】パリ国立高等音楽舞踊院より招聘のミシェル・ペロフ教授のレッスン【映像】フランス国立映画学校、韓国国立映画アカデミーの学生たちと共同で、「Luck (運)」をテーマに短編映画を制作





美術 共同学位を 目指して

美術分野では、二〇一五年にロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズ校、パリ国立高等美術学校（エコール・デ・ボザール）、シカゴ美術館附属美術大学という、それぞれ世界トップレベルの芸術系大学と、「グローバルアート国際共同カリキュラム」（ジョイントディグリー）構築に向けた協定を締結し、すでにいくつものプロジェクトで大きな成果を上げています。

これは海外から第一線級のアーティストユニットを誘致し、国際共同プロジェクトを実施するとともに、藝大からも教員・学生を派遣し、世界で活躍できる芸術家の育成を目指すものです。文部科学省「国立大学改革プラン」を踏まえたものですが、藝大挙げてのグローバル戦略展開の重要な一環となっています。

藝大がハブの役割を果たして三大学との共通プログラムをつくり、共同授業や成果発表を重ねて、将来は共通の学位を取得できるようになります。二〇一五年から二〇一六年にかけて、ロンドン、パリ、シカゴの三校と各々チームを組んで、教員・学生ユニット各々一〇名程度がそれぞれの国を訪問し合い、ブランディング、リサーチ、フィールドワーク、ワークショップ、ディスカッションなどの共同授業を実施して、活発な活動を展開しています。

ロンドン芸術大学とは、二〇一五年、高松の特別名勝・栗林公園を舞台に「庭園／ガーデン」をテーマにソーシャル・アート・プラクティス（現代アートの社会実践）を展開し

音楽

早期教育とも

連携して 世界にはばたく 才能を

音楽分野では、スーパークローバル大学構想の一環として、二〇一五年に英国王立音楽院との交流協定を更新し、活発な交流活動を

ました。エコール・デ・ボザールの場合は、パリと東京で共同授業、そして新潟の「越後妻有トリエンナーレ二〇一五」で、「私と自然」というテーマでその成果を発表。それぞれ大きな反響を得ています。シカゴ美術大学とは、東京、広島とシカゴという都市の比較文化をテーマにして、広島の「国際フォーラム」で最終発表がありました。それぞれ二〇一六年度には、成果発表の場を海外へと移して、さらに発展した計画を立てています。

この三大学とのプロジェクトをさらに押し進めるため、「グローバルアートプラクティス専攻」（修士課程）入学定員一八名、うち留学生六名を、大学院美術研究科に新設します。グローバルな文脈で現代アートの社会実践を志向する研究と人材育成を目的としており、四つの大学の学位を取得できる国際共同学位（ジョイントディグリー）の実現への第一歩となるものです。

このほかトルコやイスラエルの美術大学との連携も強化されつつあります。また二〇一六年二月一日には、「オランダ芸術科学保存協会」（N I C A S）と学術交流協定を結び、美術品・文化財の保存修復を研究・実践するプロジェクトを進めることになりました。その一歩として、藝大COI拠点の高精細複製技術とオランダの優れた科学分析技術が連携を行なう予定です。

また、二〇一五年にはハンガリーのリスト音楽院とも大学間交流協定を締結しました。現在、共同学位（ジョイントディグリー）の構築を目指して両校で検討を行なっています。

また、二〇一五年にはハンガリーのリスト音楽院とも大学間交流協定を締結しました。まずは大学院音楽研究科器楽専攻ピアノ研究分野での共同カリキュラムをつくり、ハンガリーと日本で一年ずつ計二年学ぶと、両校の修士の学位を取得することができます、という構想です。こうした共同学位の実施は、日本では芸術分野で初めての試みとなります。

海外の音楽大学との交流協定と並行して、将来音楽家を目指す全国の子どもたちを対象に、わが国初となる「早期教育プロジェクト」を二〇一四年度から始めています。このプロジェクトでは教授陣が日本各地に赴いて、小中学生にピアノ、ヴァイオリンなどの公開レッスンを実施します。継続的・段階的に指導を行なうことで、優れた才能を最大限に伸ばして開花させ、世界への飛躍につなげるこ

院との交流協定を更新し、活発な交流活動を開始しています。同音楽院は一八二二年に創立されて以来、優れた音楽家を数多く輩出している名門。学生・教員の交換、共同研究、邦楽器と洋楽器を組み合わせた作曲事業、また合同オーケストラを編成して日英両国でコンサートを行なうなど、包括的なプログラムを計画しています。

すでに、音楽院より藝大へ二人の教授が招聘され、藝大から音楽院へ箏や尺八など邦楽科の教員・学生六人を派遣、音楽院で公演を行ない、ワーキショップも開催して大好評を得ました。音楽院のジョナサン・フリーマン・アトウッド学長は、「国際的に活躍する人材の育成を目指す藝大と、日本の多様な音楽や演奏手法を学びたい音楽院の双方にとってよいタイミングだ。大いにメリットがある」と語っています。

【美術】1. オランダ芸術科学保存協会との連携に向けた会談で、藝大を訪れたルッテ首相が複製画の制作技法を見学 2. - 5. ロンドン芸術大学との共同展で、高松の子どもと交流する同大学生。ロンドンの街路でもパフォーマンスを展開 3. シカゴ美術館附属美術大学との共同授業でのプレゼンテーション 4. - 7. エコール・デ・ボザールとの共同制作「私と自然 11 の夢」の舞台（越後妻有）と、その中間発表で講評を受ける学生たち 6. イスラエルのベツアルエル美術デザインアカデミーとの交流（アカデミーの校舎）【音楽】8. 韓国延世大学校との交流演奏会 9. 英国王立音楽院より招聘のニール・マッキー教授のレッスン

とを目指します。今後、開催地域や対象年齢を広げ、海外の世界一線級のアーティストも講師に招くなどの計画を検討しています。また、高校二年生から藝大に入学できる「飛び入学」も二〇一六年からスタートします。

こうした取り組みや制度により、優れた才能をいち早く発見し、世界で活躍できる音楽家として育成していきます。そのために奨学金や留学準備金などの支援をしていきたいと考えています。

このほか、外国の音楽家との交流も多彩に繰り広げられています。二〇一五年度には、パリ国立高等音楽舞踊院からミシェル・ベロフ氏（ピアノ）、英國王立音楽院からニール・マッキー氏（声楽）、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団からヴァンツエル・フックス氏（クラリネット）、オラフ・オットー氏（トルンボーン）ら、世界中から著名な教授・演奏家を招聘し、レッスンはもとより公開講座や学生・藝大教員との共演による演奏会も多

数行ないました。韓国や中国などアジアの国々の音楽院とも交流演奏会を開きました。

五名の卓越教授。

映像 盛んな 共同制作

二〇一五年度、世界最先端の映像教育を行なっている南カリフォルニア大学から、教員ユニットを招聘して、「映画学」「国際映像メディア論」の講座を開講し、大学院映像研究科の共通科目として、ドキュメンタリーからミュージックビデオ、バーチャルリアリティなど先端分野の講義やワークショップを開催しました。講師はリピット・水田美、シーラ・ソフィアン、エリック・ハンソン、マイク・パターソン、キャンダス・レッキンジャーの

さらに、二〇〇六年度から続く韓国国立映画アカデミー、二〇一〇年度から続くフランス国立映画学校との連携により、二〇一五年度も、藝大を含めた三校の学生を対象に、短編映画制作やワークショップも行ないました。加えて、同年度、産学連携の研究が活発化されました。

カナダのセンター・フォー・デジタルメディアから講師二名を招聘し、メディアとゲームを中心に、博士後期課程の学生を対象とした英語による研究発表・討論が行なわれました。

【音楽】1. 英國王立音楽院との交流協定調印式。澤音楽学部長とフリーマン・アトウッド学長 2. 和歌山県での早期教育プロジェクト（澤音楽学部長）3. リスト音楽院との交流協定調印式。渡邊健二理事とピアノ科ドラー・フィ教授 4. フィリップ・ミュラール元パリ国立高等音楽舞踊院教授を招聘してのレッスン 5. 英國王立音楽院での邦楽のワークショップ【映像】6.・7. フランス国立映画学校、韓国国立映画アカデミーの学生たちとの短編映画の共同制作で横浜をロケ撮影 8. 南カリフォルニア大学ユニットのアニメーション・ドキュメンタリーのワークショップ。左から2番目がシーラ・ソフィアン教授 9. 中国传媒大学と韓国芸術総合学校と映像研究科によるアニメーション国際学生共同制作



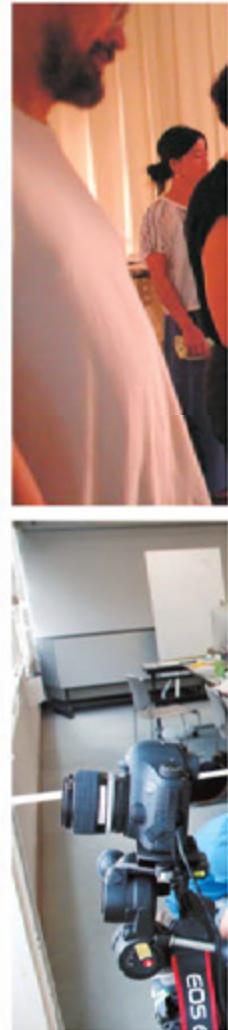
5



6



7



教員は語る

Professor Interview

小鍛治邦隆
音楽学部作曲科 教授

たまたま作曲科と楽理科に
同じ年に入学したお二人。
専攻が違っても、考え方や進路が違つても
毎日のように議論した。



そもそもの「馴れ初め」は

土田 私たちの入学は一九七三年ですね。小鍛治君と初めて会ったのは一年のときで、金子篤夫先生という、藝大の楽理科と作曲科の両方を出られた方の楽曲分析の授業でした。たしか一学期の終わり、金子先生のお宅に二人で遊びに行つたことがありますね。それから体育の授業が一緒で、体育の先生は野口体操の野口三千三さん。小鍛治 こんにゃく体操だ。

土田 そうそう、みっちりしこかれただけでも、全然できなかつた。二年生になってから、副科の実技でヴィオラの授業も一緒でした。私は弦楽器は初めてで、楽器の持ち方から調弦の仕方などゼロからね。

小鍛治 それに、現代音楽のことや、武田明倫先生の授業も一緒に。

ムの自筆スコア・コピーを先生からお借りしたりして。現代音楽関係の授業が多かつた。

小鍛治 うん。そういう授業が出ていだつた。

土田 作曲科と楽理科では、いくつか共通の授業があつたんだけど、お互いに専門の領域になるとなかなか授業では一緒にならなかつた。でも、あなたの恩師の松村楨三先生の「ハルサイ」の授業を聴きに行つたときはおもしろくて、とても参考になつた。

小鍛治 管弦楽法の授業でストラヴィンスキイ『春の祭典』。先生はこれしか扱わなかつた(笑)。それに、小泉文夫先生の授業もおもしろかったね。あの時代、先生の洗礼を受けた人は多いと思う。

土田 日本における民族音楽研究の先駆者ですからね。私が楽理科の常勤になって間もなく亡くなられました。

朝比奈のブルックナーをのぞきに

小鉄治 いや、全部ハッタリです
から（笑）。
土田 でも、私はおもしろく聞いていました。全然考え方方が違うから。
小鉄治 互いに相当違うから気にならない（笑）。それに、土田君は音楽にすごく情熱があつて詳しいから、話しているととても刺激になつた。

小鉄治 今に比べれば、みんなずっと議論していた。
土田 もうありとあらゆる話をしましたよね。
小鉄治 ぼくはけつこう、人の話を聞くタイプでね。
土田 ところが、あなたの意見は、かなり過激で一般的ではなか

つた。
小鉄治 いや、全部ハッタリです
から（笑）。
土田 私はなんの楽器もろくに弾けないけど、とにかく独壇系の音楽が好きで、特にブルックナーに興味があった。それについて研究したいと思って、楽理科に入つたのです。

小鉄治 ぼくの場合は、はじめピアノを習つていて、中学生ぐらいから作曲に興味が湧いた。そこで藝大に入つてもっと作曲を勉強したいということでしたね。ブルックナーについては、つまらないん理解が深いんだ。
小鉄治 当時、ヨーロッパの音楽とは何なのか、それが一番知りたかった。それをきちんと押されていました。先生は一九五〇年代のパリに留学してきて、作曲理論（エクリチュール）、ソルフェージュなど、一番根幹の部分を藝大で指導していました。当時の藝大のアカデミズムを支えていたわけ。そこにはくらが入つてきたわけ

ナードの交響曲のリハーサルに忍び込んだことがあるんです。
小鉄治 部外者立ち入り禁止だったから、二階の窓をちょっと開けてのぞき込んだ。
土田 今思うと、朝比奈さんのリハもかなり適当で、「ドイツのオケなんて、低弦ね、いちいち細かいこと弾いちゃいないんですよ」とか言って（笑）。

小鉄治 「ぼくの棒見ちゃだめなんです、わはは」とか。ちょっと振りが難しいところになると棒を隠しちゃうんです（笑）。それをみんなで一所懸命弾く。いい時代でしたよ。そんなわけでブルックナーは、今やマーラーよりずっと好きなんです。土田君は大恩人です。

七〇年代の教授陣と同世代の人たち

小鉄治 なるほどね。作曲科では戦前にパリ国立音楽院で学ばれた池内友次郎先生を中心として、相



だ。青島広志とか藤井一興とか。
土田 古楽の鈴木雅明、ソルフェ

ー・ジユ専任の照屋正樹、演奏藝術センターの松下功とか。

小鉄治 ピッグな作曲家になった西村朗もね。なかなか個性的な面々だった（笑）。

土田 我々より一〇年ぐら前には、楽理では柴田南雄先生が、現代音楽の最新のところを研究、講義されていて、楽理科は現代音楽と縁が深かったわけ。同時に服部幸三先生や、我々のころからは私

の師匠の角倉一朗先生による音楽史や理論のアカデミックな研究が王道でもったんですが、船山隆先生が美学と現代音楽を担当されて、バランスはとれていた。

小鉄治 なるほどね。作曲科では当アカデミックな路線を進進していました。一九七〇年代になると、それが整ってきてかなり正道をいく教育になった。だから、藝大では現代の音楽の最先端は教えられないという批判もあつたけど、艺大は最先端じゃなくて、基準になるものは何か、ということを教えるところですよ。そういう意味では七〇年代には非常にい指揮者が集まっていたんです。「藝大アカデミズム」という言葉は、ひとつ時代を象徴するもので、七〇年代のキーワードだよね。八〇年代以降ポストモダンの時代になると、近代とか前衛と言ってきた

ものが破綻して、創作の方向も多様化して来た。

土田 船山先生は私が二年生のときに着任されて、私のクラスの担任になられた。船山先生が学生時代には、前後の学年に小杉武久さん、水野修孝さん、武田明倫先生、佐野光司先生とか、現代音楽の最前線にいたような人たちがそろつていたんですね。

小鍛治 作曲科のほうは矢代先生や松村先生を中心に、若い世代では野田暉行先生たちが専任教員として教えられていたけど、実際の仕事は別として、学内では現代音楽に焦点を合わせたような授業はあまりなかったね。

土田 反アカデミズム、在野とい



音楽学部1号館（左奥）と3号館（右手前）。

1973年頃

うと、判官びいきで、もてはやされるけれども、藝大でやるべきことは、まず基礎の徹底的な訓練を確保することだと思います。ただ、伝統といつてもその中身は実は刻々と変わっているのだけれども。

土田 あなたは一九七七年にパリに留学したんだよね。オリヴィエ・メシアンの最後のころの弟子。

小鍛治 とにかく外国に行つてみたかった、ぐらいのことだから、フランス語もほとんど勉強していなかつた。

土田 よくそれでメシアンの授業

が受けられたね。

小鍛治 不思議なもので、聞いているとなんとなくわかる——全然違つていて（笑）。

土田 私が一九八〇年にパリにでかけて会ったときは下宿に泊めてもらつたりして。ちょうどメシア

ンはオペラ『アッシジの聖フランチエスコ』の作曲中だった。

小鍛治 そう。結局ほんらの世代は、ヨーロッパというものがひとつの中基準だったのは確かだね。行ってみて初めて、だめだこりや、自分たちが勝手に音楽と思いこんでいたものとは全然違う。それでも、ヨーロッパから何を学ぶべきか、といったことは、七〇年代の藝大では比較的可能だった。先代たちが頑張つてやってくれたんだなど、今ごろになつて思います。ぼくらはあそこまではできないなと。

土田 同じ年に数日だつたけど、あなたがイタリア語の勉強をしていたフィレンツェでも会つたよね。あとは、私はヨーロッパ中走り回つて、もうひたすらオペラを見ていました。

小鍛治 当時ぼくはウイーンに通つて指揮を勉強していたから、オペラを振るために、イタリア語、ドイツ語、フランス語をそれぞれの土地で学んでいた。ロシア語は帰国してから語学学校で少しだけ勉強したけど。

土田 あなたよく言うけれども、大事なのは語学だと。そこは偉い



が受けられたね。

小鍛治 不思議なもので、聞いているとなんとなくわかる——全然違つていて（笑）。

土田 私が一九八〇年にパリにでかけて会つたときは下宿に泊めてもらつたりして。ちょうどメシア

ンはオペラ『アッシジの聖フランチエスコ』の作曲中だった。

小鍛治 そう。結局ほんらの世代は、ヨーロッパというものがひとつの中基準だったのは確かだね。行ってみて初めて、だめだこりや、自分たちが勝手に音楽と思いこんでいたものとは全然違う。それでも、ヨーロッパから何を学ぶべきか、といったことは、七〇年代の藝大では比較的可能だった。先代たちが頑張つてやってくれたんだなど、今ごろになつて思います。ぼくらはあそこまではできないなと。

土田 同じ年に数日だつたけど、あなたがイタリア語の勉強をしていたフィレンツェでも会つたよね。あとは、私はヨーロッパ中走り回つて、もうひたすらオペラを見ていました。

小鍛治 当時ぼくはウイーンに通つて指揮を勉強していたから、オペラを振るために、イタリア語、ドイツ語、フランス語をそれぞれの土地で学んでいた。ロシア語は帰国してから語学学校で少しだけ勉強したけど。

土田 あなたよく言うけれども、大事なのは語学だと。そこは偉い

と思つた。

小鍛治 指揮でも作曲でも語学は大切ですね。特にヨーロッパでは、多くの場合、作曲家が自作を売り込みに行くと、とにかくひたすらしゃべりまくつて、自分の曲が演奏されるところまで持つていかなくちゃならない。話はそこから。マネジメントにも、英語を中心とした言語は非常に重要です。もうひとつ、音楽作品の大半はテクストを持つっていますからね。

土田 そう。一八世紀まで西洋音楽はまず声楽がメインで、器楽は従属物でしょう。

小鍛治 言葉というものは、常に音楽と関連しているわけですね。樂語も含めた言語を知ると、音楽語法の具体的な違いや共通点がわかる。これは、ぼくがヨーロ

芸術文化は政治とどうかかわるか

ツバに行って最初に強く感じたことでした。

土田 一九八〇年代以降、ポストモダンの時代になると、それまでの“大きな物語”が崩れ去つて、ものの考え方がすごく自由になりました。たとえばボビュラー音楽研究なんて、前は一顧だにされなかつたけれど、今やもう一番人気。でも、基本的な研究法はひとつで、いつも学生に口酸っぱく言つてゐるんだけど、本書かれて



が受けられたね。

小鍛治 不思議なもので、聞いているとなんとなくわかる——全然違つていて（笑）。

土田 私が一九八〇年にパリにでかけて会つたときは下宿に泊めてもらつたりして。ちょうどメシア

ンはオペラ『アッシジの聖フランチエスコ』の作曲中だった。

小鍛治 そう。結局ほんらの世代は、ヨーロッパというものがひとつの中基準だったのは確かだね。行ってみて初めて、だめだこりや、自分たちが勝手に音楽と思いこんでいたものとは全然違う。それでも、ヨーロッパから何を学ぶべきか、といったことは、七〇年代の藝大では比較的可能だった。先代たちが頑張つてやってくれたんだなど、今ごろになつて思います。ぼくらはあそこまではできないなと。

土田 同じ年に数日だつたけど、あなたがイタリア語の勉強をしていたフィレンツェでも会つたよね。あとは、私はヨーロッパ中走り回つて、もうひたすらオペラを見ていました。

小鍛治 当時ぼくはウイーンに通つて指揮を勉強していたから、オペラを振るために、イタリア語、ドイツ語、フランス語をそれぞれの土地で学んでいた。ロシア語は帰国してから語学学校で少しだけ勉強したけど。

土田 あなたよく言うけれども、大事なのは語学だと。そこは偉い



小鍛治邦隆教授

て音楽文化の基準としての意味を強めていると思う。

土田 ある演奏家が、自分は演奏ばかり一所懸命やつてきたけど、音楽学を勉強するようになつてから、演奏するときに自由になった、と言つていました。正解は教えられた一つではない、これも正しい、ああいう見方もある——解釈、再創造の選択肢が増えて自分で選べる。そういうことがわかつたのは音楽学のおかげだと。それはとてもいい方向だなと思っています。

を突きとめながら読む。これは文獻読解の基本中の基本だけれども、こうした方法は昔から変わつていません。

小鍛治 なるほどね。いまのよう

にインターネットの時代になつてくると、みんな情報を共有してしまつていてラクなところもあるけれど、確証がない情報もあふれていくので、逆に負担にもなるね。

土田 今の作曲の世界では、例えば五〇年代、六〇年代のような、前衛的な手法の見本とか、注目されるような方法とか技法といふものが、もうないでしょ。むしろあらゆる時代のいろいろな音楽の様式をみんなが共有し、そから自由に選べるようになった。

小鍛治 そうです。いわばファンション化したとも言える。作曲に商品化されたとか言われるけれども、むしろ選択肢が増えて、学習法や教師を自分で選びとれるの選択肢として以上に、あらため



土田英三郎教授

1980年、パリに小鍛治教授（左）を訪れた
土田教授（右奥）



土田英三郎（つちだ・えいざぶろう）
音楽学部楽理科教授

1952年東京生まれ。77年東京藝術大学音楽学部楽理科卒業。81年同大学大学院音楽研究科博士課程音楽学専攻中退。82年同大学音楽学部常勤講師、84年同大学音楽学部助教授。専門は音楽形式の歴史と理論、作曲家研究ではベートーヴェンとブルックナー。著書に『ブルックナー』（新潮社）、共著に『ベートーヴェン事典』（東京書籍）、『ベートーヴェン全集全10巻』（講談社）、『転換期の音楽』（音楽之友社）など。2003年より現職。

小鍛治邦隆（こかじ・くにたか）
音楽学部作曲科教授

1955年三重県生まれ。77年東京藝術大学音楽学部作曲科卒業。パリ国立高等音楽院作曲科でO.メシアン他、ピアノ伴奏科でH.ビュイグ=ロジェに師事。ウイーン国立音楽大学指揮科でO.スイトナーに師事。83年クセナキス作曲コンクール（パリ）第1位。2004年サントリー芸術財団・佐治敬三賞他受賞多数。CD小鍛治邦隆作品集1,2(AlM Records)、著書に『作曲の技法 バッハからヴェーベルンまで』（音楽之友社）、『作曲の思想 音楽・知のメモリア』（アルテスパブリッシング）他。2011年より現職。

あるいは各種財團などサポーター的な組織が助成しなければ成り立たない。文化は創作の在り方まで規定するので、音楽も思うほど自由なものではないんです。

土田 芸術は昔から政治や権力に利用されてきたし、逆に芸術家もしたたかに政治を利用してきました。欧米では特にそうです。歴史を見ればそういうことが見えてくる。

これまで日本では、「芸術」というものを必要以上に「聖域」に持ち上げて、政治や俗事とは無関係な扱いをしてきていた。これからは嫌でも音楽と政治の結び付きを意識せざるを得ないかも知れない。

今日本には、役に立つたり強してきた人たちでも、結局、自分の外部との関連で仕事をして生きていくわけですね。だからパトロンとつき合うマネジメントも大事（笑）。大きく言つちゃえば、文化・芸術を規定するのは、基本的にはその時代の文化に対する考え方や経済ですよね。それに、創作というのも、行政や放送局、

お金につながったりする学問ばかりがもてはやされ、人文系を軽視する風潮がある。これは文化の破壊ニコノミック・アニマルの発想です。これには断固反対したいところです。科学技術や経済はもちろん大事だけれど、合理的な手段は提供しても、よい生き方とは何かを教えてはくれない。人間の生き方を問い合わせるのは人文学や芸術こそです。藝大では、リアルな教育方針のもとで、アカデミズムを含めてやるべきことをやつしていく。これはぜひ強調しておきたい。

小鍛治 お互いどうもむずかしい話になつちゃったね。

土田 昔と変わらないなあ（笑）。

研究室探訪

Visiting the Laboratory

Vol.10

音楽学部器楽科オルガン専攻

Organ Studio

藝大の教員や学生たちが、

日々の研究やレッスンに勤む

「研究室」のなかは

どうなつてているのだろう?

なかなか見る機会のない部屋を

潜入ルボする。

パイプオルガンの醍醐味

現在のオルガン科は、藝大音楽学部の発足

(一九四九年)と同時に開設されているが、藝大にオルガン専門の枠が設けられ、学生が学ぶようになったのは、明治時代後半期になつてからようだ。一八九九年には、足鍵盤を装備したアメリカ製の二段鍵盤リードオルガンが設置され、多くのオルガニストを輩出している。

しかし、洋楽専入の時代のことなので、パイプオルガンの設置などについては、実はまだよくわかつていないところもある。現在、オルガン専攻創設期のこととをテーマに、修士論文をまとめているオルガン科の学生がいるそのうでの、やがて詳しいことがわかるはずだ。ところで、パイプオルガンでは、まるでコックピットのようなコンソール(演奏台)に座り、鍵盤やペダル、周囲のストップ(音色選択装置のこと。音栓とも)などを縱横に操作して、オーケストラ同様、ホールもゆるがせるばかりの大音響を、たつたひとりで鳴り響かせることができるし、また、逆に小型のボジティフ・オルガンを弾いて、ひそやかで親密な音楽を楽しむこともできる。こうした幅の広さは、オルガンならではの醍醐味であろう。

オルガン科に学びにくる学生の皆さんには、こうしたオルガンの魔力にとりつかれてしまつた人たちなのだ。残念ながらピアノやヴァイオリンと違つて、日本ではオルガンに触れる機会が少ない。教会やキリスト教系の学校などでオルガンに出会うケースがほとんどなので、オルガンのレッスンを受けるのが、早くても中学生ごろ、または他の大学に入つてからの場合もある。そこから短期間の習練でハーデルの高い藝大に入学した皆さんには、大変な努力をなさつたに違ひない。

偏らずに幅広く学んでほしい

オルガン科は、二〇〇六年からオルガン科を教えられている廣江理枝准教授を中心に、徳岡めぐみ、椎名雄一郎、近藤岳、横田宗隆の4氏の非常勤講師が、実技、即興演奏、オルガン概論(歴史、建造、構造など)を担当され、学部生一人、修士九人、別科二人、計二十二人が学んでいる。

授業では、実技レッスンと様式研究やオルガン概論、音楽史などの講義を並行して進めている。訪問させていただいた授業は、廣江准教授による週一回の様式研究のクラスで、一年から四年までの学部生が全員集まる。教科書は、ヨン・ラウクヴィック著「歴史的な演奏習慣を学ぶ教則本」のドイツ語原本。オルガンのレパートリーは、ルネサンス期から現代まで約七〇〇〇年と幅広い。時代や地域により楽器や演奏様式もさまざま。そうした基礎知識を学ぶにはたいへん重宝な文献であり、語学力もつく。これを順番に読解し、実際に楽器を弾いて確認する。クラスには笑い声も聞かれ終始和やかな空気がただよつている。ちなみにこのクラスでは、クリスマスの時期にはお茶会も開かれ、キャロルを歌つ

て楽しんだそうだ。

あとは個人レッスンがそれひとり一週間に一時間ずつ。こうして四年間勉強すると、一人前のオルガニストとしての一歩を踏み出したというところ。ここまでくると、皆さんもう後には引けなくなる。そこで、ほぼ全員が大学院進学や留学を経験し、さらに研究を続けて腕も磨いていく。

「音楽だけでなく幅の広い知識を身につけ、演奏法もいろいろな時代や地域のものを経験し、幅広いレパートリーを身につけることを目標にして学習を積み、その後に自分のやりたいことを見つけてほしい」——これが廣江准教授が学生たちに望むことだ。

バツハの当時の音色を求めて

オルガンは大小の木製・金属製のパイプに空気を送つて音を出すので、木管や金管が大集合した楽器ともいえよう。これを普通、複数の手鍵盤と足鍵盤(ペダル)を使い、ストップという音色を選択する機構を操作して演奏するわけだ。

近現代の作品を除き、通常オルガンの楽譜にはどのストップを使うかの指示はない。そこで演奏者がストップの種類を選んで組み合わせ、音色や表情、ダイナミックなどを作り出すことになるが、そのためには、曲が書かれた当時の楽器や演奏習慣をよく知ることがたいへん重要となる。文献や録音された音源も大切な手がかりとなるが、たとえばバツハの曲であれば、バツハが弾いたと想定される楽器がどんなものかを知ることが一番の早道だ。

実際に、二〇一五年三月、スバーバークローバル大学創成支援事業の一環として、学生六名と廣江准教授・横田非常勤講師が、バツハが活躍したドイツのテューリンゲン、ザクセン



奏楽堂のオルガン。ホールと
一休となって設計されている



1：廣江准教授の様式研究の授業風景。後ろのオルガンは1993年フランス製で、フランス古典期やバロック音楽のレパートリーを弾くには最適の楽器 2：廣江准教授の指導によるレッスン 3：レッスン室のオルガンのストップ 4：原書講読でも、実際に楽器を弾いて確認する

素晴らしい奏楽堂のオルガン

レッスン用のオルガンは、三段鍵盤三〇ストップの大型の楽器をはじめ四台がそれぞれレッスン室に設置され、ほかにアンサンブル用に持ち運びのできるポジティフ・オルガン

ン地方を訪問し、実際にバッハが演奏したであろう楽器や、設計に関わったり、鑑定したりした楽器など、六日間で計一二の歴史的オルガンを見学し、弾いてみたのである。

「これは藝大でも初めての経験で、いろいろなことがわかり、またどんなことを探求すべきかも知ることができ、とても貴重でかつ楽しい経験でした」と廣江准教授は、現地での体験の大切さを強調され、「日本では、年代を経たいわゆる歴史的楽器は存在しないので、学生たちにはヨーロッパに行つて浴びるほどにオルガンを聴いたり弾いたりして、各方面の能力をつけた、守備範囲の広い演奏家になってもらいたい」と願っている。

留学経験のある修士四年の野田優子さんは、「二年間のドイツ留学で、教会や学校で数多くのオルガンに触れることができたのは、とても大きな収穫でした。楽器による音色の違いに触れ、ストップによる調整の経験をたくさん積むことができたので、曲を弾くために必要なインスピレーションや自分の引き出しがぐっと増えました」と、その大切さを語った。

また一方、外国からも、二〇一四～二〇一五年にかけて、スペインのオルガン音楽の専門家アンドレス・セア・ガラン教授をはじめ、フランスから一人、ドイツとアメリカからひとりずつ教授やオルガニストを招聘してマスタークラスを開いており、学生たちには演奏や研究を深めていくための、またとない機会となっている。



5：オルガンの楽譜 6：奏楽堂のオルガン全景 7：奏楽堂のオルガンでのレッスン。奏楽堂のオルガンは、ソロやアンサンブル、オーケストラの演奏会でも大活躍

が一台ある。一九九八年に新しく奏楽堂ができたときには、三段鍵盤で七六のストップを持つ本格的なバイブルオルガンが設置された。これはルネサンスから現代まですべてのレパートリーを演奏でき、オルガンを学ぶうえでも大きな進展があった。

学部の二年生以上になると奏楽堂のオルガンでレッスンができ、試験も受けることができる。大学院の入試も奏楽堂で行なう。学部二年の山司恵莉子さんは、「奏楽堂で弾くと、レッスン室とは広さがぜんぜん違うので、それを実感するのがけっこう難しく、自分の耳をホールの後ろの方に持つていきたいくらい（笑）」だそうだ。

学部四年になると、三〇分のリサイタルを二回行ない、大学院では修士論文とともに四五分のリサイタルが課せられる。「学部や修士のリサイタルは大きなヤマ場です。集中力が必要ですし、時間内でいかに曲目を構成するかも課題になります。それを目標に、日々のレッスンを重ねていきます」と野田さん。

オルガン科を卒立ったたちは、コンサートホールの専属オルガニストや、ミッション系大学の教師などに就く例が多い。山司さんの抱負は「ただ楽譜のとおりに弾くだけでなく、曲や作曲者、楽器について、さまざまな角度から見て考えて、音づくりができる演奏者になりたい」ことだ。

また、ここ数年、海外コンクールでの活躍が目をひく。老舗といわれるフランスのシャルトル大型堂国際オルガンコンクールでは、立て続けに優勝者が出了。ちなみに、廣江准教授もこのコンクールの邦人女性初の優勝者。これからも、藝大的出身のオルガニストが海外で目覚ましい活躍をしていくことだろう。その土台には、オルガン科での日々たゆまぬ実践があるに違いない。

学生インタビュー

Student Interview

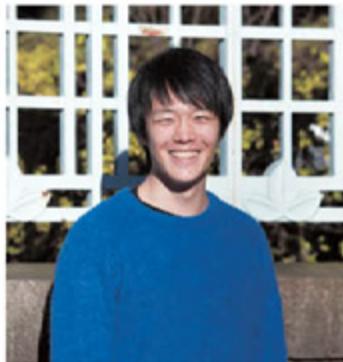
Vol.2

藝大の在校生は、公募展やコンクールなどで栄誉ある賞を受賞し、各分野の最前線で活躍している。若き才能が日々の努力と今後への意欲を語る

美術 Fine Arts

大谷陽一郎

大学院美術研究科
デザイン専攻修士1年



JAGDA 学生グランプリ 2015
グランプリ

1990 年大阪生まれ。近畿大学文芸学部を卒業後、桑沢デザイン研究所でデザインを学び、大学院美術研究科デザイン専攻に入学。藤崎圭一郎准教授に師事。

音楽 Music

黒岩航紀

大学院音楽研究科
ピアノ専攻修士2年



第 84 回日本音楽コンクール
ピアノ部門第 1 位

1992 年神奈川県生まれ。音楽学部附属音楽高等学校を経て、音楽学部器楽科ピアノ専攻を首席で卒業。大賀典雄賞受賞。秦はるひ、江口玲各氏に師事。

映像 Film & New Media

齊藤円香

大学院映像研究科
アニメーション専攻修士2年



第 27 回東京学生映画祭
アニメーション部門グランプリ

1990 年千葉県生まれ。東京造形大学造形学部デザイン学科アニメーション専攻領域卒業後、大学院映像研究科アニメーション専攻に入学。代表作に『GYRO』『愛のかかと』。

僕 は一般の大学を出た後、昼は「デザイン事務所」のアルバイトで働き、夜は桑沢デザイン研究所の夜間部で学んでいました。そのとき「視覚詩」に出会ったのです。活字を視覚的に使って詩を構成するもので、これがきっかけで文字、特に漢字というものに興味が湧きました。

こ れはもっとおもしろいことができそうだ、活字ではなく手書きの文字を使えば、グラフィックアートとしての新しい可能性があると思ったんです。

アートでは、こうしたアート表現をきちんと評価してくれるのでも、藤崎先生が指導していらっしゃる企画理論研究室に入つて、文字を軸にした作品を制作していました。

ち ょうど「JAGDA 学生グランプリ」や「JAPAN」这样一个テーマで募集だったので、自分の表現を発表できるいいチャンスだと応募したら、運よく

日 本音楽コンクールの本選はラフマニノフのピアノ協奏曲第三番という大曲でしたが、これを満席のオペラシティで初めて演奏するのは、素晴らしい体験でした。でも、実は演奏が終わつたあとに落ち込んでいたんです（笑）。この曲は自分でも思い入れの深い曲で、内容も非常に奥が深い。ずいぶん研究を重ねてきたので、もっとできたのに、と欲が出たのでしょうか。しかし、優勝というとても嬉しい結果をいただき感無量でした。

ピ アノは三歳のときから始めたんです。人前でピアノを弾くのは好きでしたが、ピアニストになりました。

アーティストとしての新しい可能性があると思ったんです。小中学校もずっと練習でしたが、ちっともいやじゃなくて、ピアノが一番の趣味だったんですね。

実 はいまだにピアノは趣味であって、「職業」とは思っていませんでした。もちろんプロの演奏家としていたのです。

藝 大のアニメーション専攻に入つてすぐに制作した『GYRO』で、グランプリをいたいたのですが、この作品では、それまで経験しなかつた新しい技法に挑戦してみました。

ま ず一枚のイラストボードに背景を描き、その上にキャラクターを描いて撮影。その絵を消さずに上から重ねて描き込んでしまいます。すると、絵がいくつも重なつて背景も埋め尽くされてしまう。ボードはワンカットごとに一枚使い、この作品では約四〇枚のボードを使用しました。どこか絵画に近い手法ですね。

物 話は倦怠期の夫婦の日常で、引き寄せ合つてもいいけど、完全に離れていいかもしれないという絶妙のバランスで、コマのように回っているという（笑）。審査の講評では、テーマと技法がよくマッチ

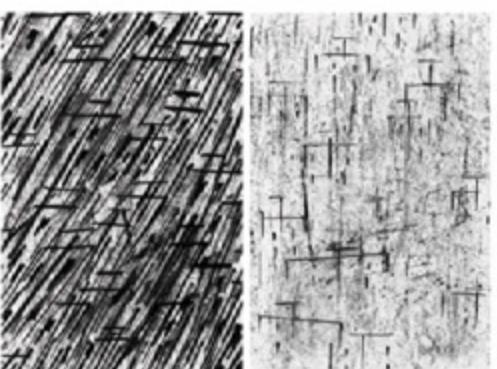
グランプリをいただいたのです。

日 本の風土や文化には、雨というものが大きく影響を与えていて、豊かな自然の恵みもあれば、洪水などの被害もある。先人たちは雨にまつわる言葉をたくさん残しています。雨はまさに日本を表すものとして題材にしてみました。

ま ずB2ぐらいの用紙に、エンビツ、木炭、マジックインクなど、普通に手に入る筆記用具や規格などを使って何枚か描きます。それをパソコンに入れてレイヤーで重ねていき、一枚の画像として、厚みや奥行き感を出します。絵と文字が一体化していますが、そのこと自体も「JAPAN」じゃないかと思うんです。墨一色ですので、これも書道や墨絵の伝統につながるものかもしません。

こ うした印刷物もおもしろいのですが、ディスプレイを使った表現など、自分のメディア表現の幅を広げることができます。

で も、とくに「漢字アーティスト」といったものになりたいわけじゃなくて、文字という自分の武器を使って、グラフィックデザイナーとして仕事をしていきたいと考えています。



『雨』

「JAPAN」という大きなテーマだったが、雨という文字を題材に選び、「小雨」と「大雨」をイメージして制作。2つを並べることによって互いの相乗効果を狙う。出品作のサイズはB全。



日本音楽コンクールでは、予選から本選まですべて自分でプログラムを組んだ。写真は2015年8月29日(土)に栃木県総合文化センター サザンホールで行なわれたピアノリサイタル。



『GYRO』

1枚のイラストボードに絵を何回も重ねて書き込んでいく手法で制作。タイトルの「GYRO」は、回転ながらもバランスをとりながら回っている夫婦関係を、ジャイロスコープになぞらえたもの。

ての責任感はつねに持っていますが、スタンスとしては、音楽が好きだから、みんなと一緒にその楽しさを分かち合って演奏していきたい、ということなんです。

尊 敬するピアニストは、マルタ・アルゲリッチとウラディミール・ホロヴィッツ。まず音楽が非常に立体的で、人を惹きつけるものをもっています。

ピ アノを弾いている時間は、アンサンブルの練習も含めて、たぶん一日一〇時間以上でしょうね。演奏したい曲はやまほどあります。ラフマニノフはじめロシアの作品や、ドビュッシーなどフランスの曲も積極的にプログラムにかけますし、ガーシュウィンやカブースチンのようなジャズ・クラシック系や、現代の作品も大好きです。音楽の素晴らしさは、どんなジャンルでも変わらない。クラシックのピアニスト、として自分をまとめたくないんです。

私 は絵画をはじめ、音楽、それに写真に興味があります。それに座学が好きで哲学とか文化人類学とかにも首をつつこんでいるうちに、「女性」という

京造形大学のアニメーション専攻では、まったく基礎から勉強し、3DCGアニメや人形アニメなど、いろいろなアニメーションの技法を学びました。それに座学が好きで哲学とか文化人類学とかにも首をつつこんでいるうちに、「女性」というテーマに関心を持ったのです。卒業制作の『INGW』は魔女をテーマにした作品だったのですが、もっと女性をテーマにした作品をつくりたいと思って芸大に入ったので、『GYRO』はその二作目ですね。

東 くの基礎から勉強し、3DCGアニメや人形アニメなど、いろいろなアニメーションの技法を学びました。それに座学が好きで哲学とか文化人類学とかにも首をつつこんでいるうちに、「女性」という

実 は、私は、最近魔女になつたんです(笑)。魔術の世界にすっかりハマつてしまつて。占星術やタロットカード、儀式なんかもあります。次の作品に魔術がどう生かされるか、自分でも楽しみです。

しているという評価をいただきました。

--

--

--

新しい可能性をはらむ

オタクカルチャーに

大きく期待したい

卒業生に聞く

Interview with a Graduate

「第一〇回」



福嶋麻衣子

二〇〇六年 音楽学部音楽環境創造科卒業

ほとんど子育て状態

実際に「虹コン」を始めてみて、これまで

すでに振付などはメンバーが考えたものをステージに取り入れたりしていますが、「虹コン」を志望する女の子が増えて力がついたら、デザインや作詞、作曲など、部門もどんどん増やしていきたいと思っています。

そこで、イラストのSNS「pixiv」（ピクシブ）を運営する会社と話して、「つくドル」（つくるアイドル）というプロジェクトを立ち上げ、その第一号として、「虹のコンキスタドール」を始めました。メンバーは現在一〇名で、年齢は一歳から一九歳。イラスト、コスプレ、振付、声優の四部門に分かれています。それぞれ、普通にアイドルとしての仕事や、ボイストレーニング、ダンスレッスンなど基礎的な訓練に加えて、ワークショップや授業で自分の目指す分野を勉強しています。

私がいまサウンドとクリエイティブディレクションを担当している「虹のコンキスタドール」（略して「虹コン」）は、二〇一四年にデビューしたアイドル・グループです。ほかのグループと大きく違うところは、アイドルだけが仕事じゃなくて、メンバーそれぞれがクリエーターとしてのスキルも身につけて育っていく、というところですね。

若い女の子たちがアイドルを卒業したあと、どんな人生を送るかということで、彼女たちはけっこう悩んでいるんですよ。そこで、歌つて踊ることにプラスして、何かやりたいことがあれば、それを伸ばしてあげたい、と思うようになつたんです。

ニュータイプのアイドル「虹コン」

のアイドルグループとは、どうも違うなって思つたのは、まだ中学生ぐらいの子どもたちなので、ほんとに何も知らないんですよ。髪はぐちやぐちやで、服のボタンもかけ違つていたりするのを注意したり、洗濯はこうやって、アイロンがけはこう——といったような日常のあれこれを教えるのに一番苦労します。

いつたいアイドルのプロデュースやつてるんだか、子育てやってるんだか（笑）。

私の本来の仕事は、「虹コン」の全楽曲のプロデュースですので、どういう曲をつくるかという方針を立て、作詞家、作曲家、編曲家、ブレイヤーを決めます。そしてレコードディングからトラックダウン、マスタリングなどのスタジオワークまでの発注を全部やつています。宣材などの写真やミュージックビデオの制作などのアートワークも見ていています。

まだ手応えといったほどのものはないのですが、彼女たちが育つていてくれると一番うれしいし、ぜひ成功させたいと思っていま

す。
ゆくゆくは「虹コン」で培った経験をもとに高校をつくつて、これまでとは全然違う教育を受けさせたいと思っているんですよ。若い人たちに、すごい武器をひとつでも自分のものにして、自信を持って世界で戦つてもらいたいんです。藝大の高校生版というか、天才しかこないようなすごい学校が理想なんですね（笑）。

クラシックからジャズ、 そしてノイズへ

私は三歳のころからピアノをやつていて、中学生ぐらいまではピアニストになるんだと、当たり前のように思っていました。ところが、国立音楽大学附属高校に入ったころから、だ

んだんクラシックからは外れてしまったんですね。

父親がたいへんなジャズ好きで、私も小さいころからジャズに親しんでいたのですが、高校生になると、ジャズのルーツに興味が湧いて、ブルースからディキシーランド、スウェーブ、ブギウギ——時代を追つてモダンジャズに行き着くまでの音源を集めて聴くようになつて。かなりマイアックでネクラな高校生でした（笑）。

そのうちに、ファンクとかR&Bのようなソウル系の音楽に興味が移ってきて、このジャンルをさんざん聴き倒したあとに、ちょっととたしなみ程度にロックを聴いて、とうとう最後にはノイズミュージックになっちゃつたんです。

それで国立音楽大学の音楽文化デザイン学科でノイズをやるつもりだったのですが、なにせ私は気が多いですから、美術などアート方面も大好きで、藝大にも憧れていたんですね。でもピアノじゅとでもムリ……と思っていたところ、ちょうど音楽環境創造科が新しくできて、私のやりたいと思ったことにびつたり。

でも受験を決めた時期が遅かったので、勉強がまだ全然追いつかない。しかもこの学科の人試は三月で合格発表が四月。もう青木の陣で、寝るヒマもなくコタツと一緒に勉強また勉強……これが今までの人生で一番辛かつた。それを思えば、いまの仕事は超ラクですね（笑）。

かけがえのない取手の四年間

とうとう憧れの藝大に合格。茨城県の取手にできたばかりのキャンパスでした。新設の音楽環境創造科ではカリキュラムなどがまだ



虹のコンキスタドール

整ってなくて、半分ほど美術学部の科目を受けたわけですが、それがかえってとてもラッキーだったのです。

映像、メディア、色彩、写真、デザイン、

身体表現とか、音楽のほかにもたくさん授業を受けることができました。それに、当時は遊びだと思っていましたが、芝居やダンスの公演をたくさん観に行ったり、いろいろなライブを聴きまくつたりで、これがすごく勉強になりました。

取手の四年間は、間違いなく今の仕事の要になっています。プロデューサーという仕事では、クリエーターの方々との打ち合わせでも、ある程度基本がわかつていて、制作過程を経験していたりすると、実戦的にものすごく役に立つんですね。

二〇人ほどのクラスでしたが、決して仲良しクラスという雰囲気はなく、めいめい個性が強くて独立していましたから、いい意味でライバル。でもみんな頭が良くて、いろいろ刺激を受けました。

このころはまだニコニコ動画やユーチューブも登場していなかったのですが、私はライブストリーミング「喪服の裾をからげ」で、コンセプチュアルな配信を始めたりしていました。サーバー代が高いのでアルバイトを統合して、みんなが洋服を買つたりしているのに、わき目もふらずサーバー代につき込んだりして（笑）。

でも、勉強ばかりしていくほんとによかったなと思っています。いまの藝大生の方たちには、友達はいるから四年間ひたすら勉強しろ、いろいろなところに出かけ、たくさんものを見たり聴いたりしろ、と申し上げたいですね。遊ぶのは大人になってからのほうが楽しい。演劇、映画、美術、文学、科学、なんでもいいから、できるだけたくさん本物

に触れてほしい。社会に出るとなかなか本を読む時間もとれない日々ですが、大学時代に得たものが糧になっています。

お名前は？——「メロンです」

アニメソングやオタク文化に興味を持ち始めたのも藝大生のころです。インターネットカルチャードといったものにハマり込んでいたのですが、ニコニコ動画が登場すると、そこで盛り上がっている音楽があるんです。「同人音楽」といわれているものでしたが、それがぶつ飛んでいて、今まで聴いてきたどの音楽とも違う。超チープなサウンドなのにキラキラしている。それを全開にして、恥ずかしげもなくばんばんに詰め込んで聞かせてくれるんです。それまで自分がこだわっていた音響というものをぶち壊すぐらいのパワーがありました。この世界観ってなんだろう？ その衝撃から、秋葉原とか萌え文化がとても気になつたんです。

そこへメイド喫茶のブームが始まつたので、さつそくのぞいてみました。これまた衝撃なんですね。内部はハリボテみたいな感じで手作り感満載。レンジで温めたおいしくないご飯に、飲み物はジュースだけとか、まるで文化祭や学園祭の模擬店です。

そんなままごとみたいな空間なのに、これがスッゴクおもしろい。まず入っていくと、メイド服の女の子たちから「お帰りなさいませ」と挨拶されます。歳を聞いても「一七歳です」としか言わないし、お名前は？——「メロンです」。体重は？——「リンゴ三個分です」（笑）。もう完全なロールプレイングで、お嬢様とメイドという演劇世界に、いきなり放り込まれるんです。



イラストチームのワークショップでディレクションをする福嶋さん

もしろく刺激的なナマの演劇。それまで物足りないなとか、違和感があったところを全部埋めてくれるという感じで、今これが一番アツいアートなんじやないか、とのものすごく感動しました。

私のノイズミュージックも、なんか行き詰つてきていたときに、電波ソングやメイド喫茶のようなとんでもない世界に出会って、「こめん！自分が今までやってきたことは間違いでした」（笑）——そこで全部ひっくり返されて、秋葉原で私は何かやるぞ！となつたわけです。

世界に広がるオタクカルチャー

土日の秋葉原の路上は、バフォーマンスやコスプレで湧きかえっていました。そこに集まってきた仲間たちと、こういうの毎日やりたいね、ということになつて、ライブ・バーの「ディアステージ」が始まつたのが二〇〇七年。メイド喫茶と路上ライブとを合わせたような空間ですね。私自身アイドルが大好きだったので、ステージで歌つたり踊つたりする女の子たちの中から、アイドル・グループ「でんぱ組³」を立ち上げました。

当時のメイド喫茶やディアステージでは、お客様が受身じやダメで、「ご主人さま」としてノつていかないと楽しめないし、またお客様のほうから、メニューはこうしたら？とか、こんなものつくってきたんだけど使える？とか、いろいろアイディアを出してくれるんです。もともとオタクつてそうしたもので、それがオタクの魂なんですね。完璧なものを提供するんじやなくて、まだベータ版なんだけど何か意見があつたらください、一緒にやつていきましょう、という提示の仕方。つくる側とお客様と双方のバ

ワードが合流して、試行錯誤をしながらもクリエイティブなことを進めていく、それがビジネスとしても回っていく。私はこれを「学園祭ビジネス」と呼んでいます。

こうした状況は現在でも同じだと思います。未完成のものに対して、能動的に参加しているという欲求は、若い子たちの中でこれからもつともっと大きくなるんじゃないかな。今の子たちは、音楽の聴き方ひとつとっても、ルーツを知っているからカッコイイなんて発想にはならないんですね。曲のつくり方も全然違つていて、理論の壁を轟々と超えていきます。おもしろい発想やアイディアが育ちやすいんじゃないかな。そこには新しい可能性があるのだと思います。

それに、オタクって全世界共通のマインドなんです。しぐさとか表情、しゃべり方なんかも、英語なのに似ていたりして超おもしろい（笑）。日本ではオタクがマイノリティーからマジョリティーになりつつあるようですが、海外でもそとなるかもしれません。特にアジアでは、こちらが心配になるくらい熱っぽいオタクが多いです（笑）。

オタク文化は世界的に発展していく、そこから新しいものや空間、関係がいろいろできてくる、と私は大いに期待しているのです。



福嶋麻衣子（ふくしま・まいこ）

一九八三年東京生まれ。音楽プロデューサー。国立音楽大学附属高校ピアノ科から東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科へ。卒業後、ギャラリー・や出版関係の仕事を経て、ライブ・バー「ディアステージ」やロコバ「MOGRAB」を運営。アイドルユニット「でんぱ組³」を立ち上げる。現在は「PUFFY」のシングル楽曲や「夏のコンキスタドール」の楽曲・クリエイティブディレクションを担当。ラジオテレビでも活躍。共著に『日本の若者は不幸じゃない』（ソフトバンク新書）。

歴史を彩る人・作品

—総合芸術アーカイブセンターの研究から—

History of Gravur in Art and People

第二回

金次郎と尊徳—美校と二つの二宮像—

坂口英伸

二宮金次郎像と二宮尊徳像は、

それぞれ東京美術学校(美校)の関係者によつて制作され

二宮の没後五〇周年記念会は、東京音楽学校(音校)で開催された。

二宮金次郎と二宮尊徳は同一人物である。金次郎は幼名(*1)、尊徳は元服後の諱だ。二宮は「報徳仕法」による農村復興政策を提唱したことで知られる江戸時代の農政家。近代日本初となる金次郎像と尊徳像の制作者が東京美術学校(美校)の関係者だったことは、意外なほどに知られていない。

薪(柴)を背負つて歩きながら読書する姿の二宮金次郎像を誰しも一度は目にしたことがある。この負薪読書の金次

る姿の二宮金次郎像は、その姿を消しつつあるとも聞く。負薪読書の金次郎像を近代で初めて彫刻として表現したのは、鋳金家の岡崎雪声(岡崎)。岡崎は明治二十二年(一八八九)の開校時から鋳金科で教鞭

を執り、皇居前広場の楠木正成像や上野公園の西郷隆盛像など、全国的にも有名な銅像の铸造を手がけた。岡崎が金次郎像を発表したのは、明治四十三年に東京彫工會により開催された第二十五回彫刻競技会。金次郎像の制作の詳しい動機と意図は不明だが、岡崎の知己で伝記『二宮尊徳翁』を記した作家、幸田露伴から刺激を受けたと推察される。岡崎は二宮の生まれ故郷である小田原に赴き、生前の二宮を知る地元の古老に取材したようだ。

金次郎像の高さは約三〇センチ。もともとの金次郎像は、床の間や机など室内空間を飾る目的で制作されており、校庭に設置する意図で作られたわけではなかった。明治天皇はこの金次郎像をいたく気に入つてこれを買上げた。現在、この金次郎像は、御物として明治神宮宝

物殿で保管されている。

一方、尊徳像は金次郎像よりも一年早い明治四十二年に完成した(図2)。木彫の坐像で、その高さは約五〇センチ。作者の長愛之は竹内久一に師事し、当時は美校の助手。尊徳を崇敬する正木直彦(美校校長)が長を引き連れて二宮の顕彰団体である遠江国報徳社を訪問、長は岡田淡山社長から報徳の教えを受けつつ約半年間にわたり同地に滞在し、岡田が「死シテ遺憾無シ」と納資する尊徳像を作り上げた(*2)。長は二体の尊徳像を制作したらしく、一体は美校で保管されていたが、歩きながらの読書は交通事故の危険性を伴うとの保護者の要請によって、その姿を消しつつあるとも聞く。

日本報徳社(静岡県掛川市)に現存する。実は東京音楽学校(音校)も二宮に関係している。尊徳の没後五〇周年にあたる明治三十八年、音校を会場に二宮尊徳



図1：岡崎雪声による铸造の二宮金次郎像（写真：明治神宮蔵）



図2：長愛之による二宮尊徳像（写真：『斯民』第四編第十二号）

*1 正確には「金治郎」だが、「金次郎」と表記される場合が多い。

*2 八木義樹『報徳運動一〇〇年のあゆみ』龍溪書舎、一九八〇年、二二八頁。

Topics

2015.3-2016.2

1. [9.4-9.6]

2015年度 藝祭



9月4日より3日間、上野校地で「藝祭」が開催され、初日には恒例の御輿パレードを行った。オープニングイベントである御輿パレードは、美術・音楽学部の各科1年生が合同でチームを作り、夏休み返上で製作した計8基の迫力ある御輿を担いで上野恩賜公園を練り歩くもの。4日10時に学長に見送られてスタートした御輿パレードは、多数の観客の声援を受けながら、公園内を練り歩いた。途中、噴水前広場では神輿の授賞式があり、大賞には工芸科と楽理科の合同チームが選ばれた。

2. [10.10]

「学長と語ろう こんさ～と」



各界で活躍する人と宮田学長との対談を通じ、芸術の力を世界に発信しようと2015年10月10日、本学奏楽堂でトーク＆コンサートイベント「学長と語ろう こんさ～と」が開催された。18回目の今回は、「川の流れのように」の作詞や国民的アイドルグループAKB48の総合プロデューサーとして知られる秋元康氏をゲストに迎えた。テーマは「藝術とは何か？」で、異なる立ち位置の2人が、それぞれ別々の視点で「藝術」について考え、ものを作ることについて語り合った。また秋元氏の幼少期のエピソードや、ジェロ「海雪」の作詞秘話なども語られ、はじめて脚本を書いた高校2年生の夏から現在に至るまでの40年余りの豊富な経験談に、会場は盛り上がった。

第2部のコンサートは秋元氏の協力のもと、AKB48の16人と東京藝術大学インドオーケストラ（指揮：大橋晃一。音楽学部非常勤講師）による1日限りのコラボレーションが実現。エルガーの「威風堂々」から始まり、「ヘビーローテーション」で華やかに一転、「ボニー・テールとシュシュ」や「桜の木になろ

う」「ハロウィン・ナイト」などヒットナンバーが演奏された。本学弦楽科学生による、この日のためだけに特別に編成したThe String Ensemble 10.10による弦楽アンサンブルも、舞台に花を添えた。アンコールは「恋するフォーチュンクッキー」を演奏し、大盛況の内に幕を閉じた。

3. [10.20-10.25]

藝大アーツイン丸の内2015



本学と三菱地所株式会社は、10月20日から25日まで、「藝大アーツイン丸の内2015」を開催した。日本を代表するビジネス街である東京・丸の内で、次代を担う新鋭のアーティストについて情報発信しつつ、訪れた方々に気軽に芸術を楽しんで頂くことを目的として、今回で9回目を迎えた。

初日は本学管打楽学生によるファンファーレで開幕。続いて「三菱地所賞」授賞式が行われ、美術と音楽の卒業・修了生、計10名が表彰された。開催期間中は、本学教授らによる出張講義、本学が有する複製特許技術を駆使した世界的名画の超高精細複製作品を展示する藝大アートギャラリー「さわれる文化財」のほか、美術学部油畫学生によるストリートウォールペインティングなど、さまざまなイベントを行い、訪れた人々を楽しませた。

美術

FINE ARTS

1. [8.16-9.15]

藝大子アートプロジェクト



タイのシラバコーン大学、インドネシアの国立芸術大学デンバサール校、そして本学の学生らが、茨城県大子町の廃校跡や商店街でアートやパフォーマンスを披露する「藝大子アートプロジェクト」が、8月16日～9月15日に行われた。

県北国際アートフェスティバル（茨城県）のプレ企画として実施。参加アーティストは、本学からは赤沼潔、前田宏智、丸山智巳（工芸科）、齋藤芽生、杉戸洋（絵画科）、橋本和幸、鈴木太朗、榎木

恵介（デザイン科）、伊藤俊治、鈴木理策（先端芸術表現科）の計10人。これにシラバコーン大学からの11人、国立芸術大学デンバサール校からの3人、そして大子町の小中学生を合わせた、合計866人がプロジェクトに参加した。

参加者は、タイと日本で物を交換しながらコミュニケーションをとる「物々交換プロジェクト at タイ + だいご」や、藝大などのアーティストが町内の小中学校に訪問して実施するワークショップに取り組んだ。町立西中学校では、藝大絵画科油畫専攻とシラバコーン大学絵画専攻が協働し、自然の草花から作った顔料で絵画を制作。生徒ら29人が参加した。依上小学校、袋田小学校では、国立芸術大学デンバサール校から伝統影絵の「ワヤン・クリッ」の演者を招聘し、楽器や人形を実演。依上小では71人、袋田小では78人の児童らが異国文化に触れた。これらの取り組みの成果は、9月12～15日に町内で発表した。

12日には1995年に廃校した旧初原小校舎を公開。伊藤俊治教授によるバリ島文化に関する講演や映像上映会、鈴木理策准教授による写真展、国立芸術大学デンバサール校のワヤン・クリッ演者による上演、藝大デザイン科によるプロジェクトマッチングを行った。また、藝大工芸科とシラバコーン大学の協力による「校歌プロジェクト」では、校歌がなかった旧初原小で代わりに歌われた「歌えんばんばん」の歌詞を日本語とタイ語で透明化し、同校のフェンスなどで展示した。また常陸大子駅前商店街や街から美術館などでは、西中の生徒たちの作品や藝大絵画科教員・学生の作品を展示。街から美術館には4日間で108人が訪れた。

2. [12.15-12.24]

東京藝術大学大学院美術研究科博士審査展



「東京藝術大学大学院美術研究科博士審査展」（12月15日～24日）が大学美術館および大学美術館構内で開催された。本審査展は博士後期課程学生の学位取得のために行う審査の一環となっており、会期中は作品の展示のほか論文発表を行っている。また出展、論文発表に加え、作品の陳列等展示活動も学生主体で行っている。このため、出展する学生は作品の制作能力、論文発表におけるプレゼンテーション能力のほか、展示に必要な美術館利用の知識や企画運営上の注意点及び危機

管理など展覧会における知識が必要となってくる。

会場内は絵画などの平面、彫刻などの立体の他、展示室の一部を空間として表現した作品や映像作品などさまざまな種類の作品が展示された。会期中は天候に恵まれ、来館者は約6,000人となった。学生にとって来館者に対する作品の説明、沢山の聴衆を前にした論文発表は、本学修了後におけるさまざまな環境での出展、プレゼンテーションの際の自信になると考えられる。来年度の「博士審査展」の開催も同時期で決定している。

音楽

MUSIC

1. [9.26]

モスクワ音楽院主催第17回
国際音楽祭「日本の心」



◎音楽創造・研究センター

9月26日、本学邦楽専攻大学院生と修了者が、モスクワ音楽院主催第17回国際音楽祭「日本の心」に自主企画で出演した。出演者は〈研究ラボ〉で試行しているアントレプレヌール支援（音楽家のための起業家【アントレプレヌール】の精神とスキルの養成支援）を昨年度より受けってきた3名である。当日は若手アーティストたちの力量が存分に發揮され、モスクワ音楽院関係の方々をはじめ、モスクワの聴衆の皆様に大変喜んでいただいた。

2. [2016.1.10]

「千住で聴く世界の音楽」
シリーズ

◎音楽創造・研究センター



〈創造ラボ〉では、2016年1月10日、演劇・能による「KOCHO／胡蝶」を「千住で聴く世界の音楽」シリーズとして

公演した。能「胡蝶」を題材に現代劇を組み合わせた実験的舞台芸術作品で、一条大宮にたどり着いた若い修行僧が梅の木を眺めていると、不思議な女性が現れ、「胡蝶」の謂れを語る。舞台は現代からいにしえの一条大宮へタイムスリップし、幽玄の世界へ。梅花との邂逅を歓喜の舞で表す胡蝶の幻想的な姿に接し、満員の観客席は静かな興奮に包まれた。

FILM & NEW MEDIA

1. [7.18-7.20]

OPEN STUDIO 2015
メディア映像専攻 修了制作中間発表/
特別演習成果発表



7月18日から20日、横浜校地新港校舎を会場として修士2年による修了制作中間発表を開催。個々のテーマに基づき、映像やインスタレーションなど様々な形で制作や研究の成果を発表した。また、7月25日、26日には、修士1年による特別演習成果発表を開催。入学から約3ヶ月間にわたり行われた4つの特別演習の成果を展示形式で発表した。

2. [9]

大学院映像研究科10周年
記念行事

9月、神奈川県横浜市にある本学大学院映像研究科は、馬車道校舎において、同研究科10周年記念行事として、記念式典、シンポジウム、特別映画上映会を開催した。

[9.12]

記念式典・レセプション



約80名の来賓・関係者が出席するなか、大学院音楽研究科声楽専攻の学生による華やかな奏楽、岡本美津子研究科長、宮田亮平学長、遠山敦子本学経営協議会委員(元文部科学大臣)の挨拶があり、来賓代表の渡辺巧教横浜市副市長ならびに磯谷桂介文化庁長官官房審議官のご祝辞を頂戴した。また、当日上映した10周年記念のドキュメンタリー映像の中では、研究科設立時から

6年間特別教授を務めて頂いた北野武監督の藝大生へのメッセージや、歴代研究科長へのインタビュー、過去の修了制作などが紹介され、記念式典・レセプションは盛会の内に終了した。

[9.5-6 / 10-11]

特別映画上映会

「映画専攻の10年を振り返って」



9月5日、6日、10日、11日の4日間にわたり行なわれ、設置以来、映画専攻で制作された実習作品、修了作品などの中から12プログラムを上映した。修了制作として一般に公開されたものばかりではなく、実習作品など学外で上映されていない貴重な作品を多数加え、映画専攻の教育が判るよう編成され、好評を博した。

[9.12-13]

記念シンポジウム



9月12日、13日の2日間にわたり、①「映画専攻の10年を振り返って」②「歴史の逆噴射、アニメーション再考」③「メディア・アートの歴史化と抵抗」の3つのシンポジウムが行なわれた。ゲスト・パネリストにそれぞれ①映画批評家の山根貞男氏、②アニメーション映画史家のジャンアルベルト・ペングラツィ氏、③ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ教授ショーン・キューピット氏、英國サセックス大学教授サリー・シェーン・ノーマン氏、立命館大学映像学部教授北野圭介氏、東京大学大学院情報学理学/総合文化研究科教授石田英敬氏(司会)をお招きし、闘争な議論が交わされた。

3. [12.5]

第3回 OPEN TRADITION

(ゲスト:ひこねのりお氏)の実施

12月5日上野校地から輩出した日本のアニメーション界の偉大な先人と、

映像研究科アニメーション専攻の新しい才能を「つなぐ」目的の公開講座である、「OPEN TRADITION」を、ひこねのりお氏(1959年工芸科图案計画専攻卒)を講師に迎えて実施した。東映動画の初期名作に関わった同期の小田部羊一氏との対談形式で始まり、第1部で35mmフィルム上映した「わんぱく王子の大蛇退治」を話題に、時代の最先端であった制作環境についてお話ししていただいた。その後「テレビコマーシャル」黄金期に「カールおじさん」など、国民的キャラクターの数々を生み出した、50年余にわたる日本のアニメーションの進化を俯瞰する貴重な講演となった。

《第1回講師:小田部羊一(アルプスの少女ハイジ作画監督)。第2回講師:島村達雄(VFXスタジオ白組代表)》



4. [12.27]

濱口竜介監督 特別講義

「幸せな時間」とはなにか?



12月27日横浜校地馬車道校舎にて、映画専攻2期生で、修了制作『PASSION』が注目され、最新作『ハッピーアワー』では、ロカルノ国際映画祭での主演4人による日本人初の最優秀女優賞受賞が話題となった濱口竜介監督による特別講義を実施。『ハッピーアワー』は神戸での演技ワークショップをもとに、参加者たちとともにつくられた。ワークショップの一部をとらえた貴重な参考映像も上映。

美
術
館

ART MUSEUM

1. [4.4-5.17]

ボストン美術館×東京藝術大学
「ダブル・インパクト
明治ニッポンの美」



4月4日から5月17日まで、本学大学

美術館本館にて、「ダブル・インパクト 明治ニッポンの美」が開催された。本展覧会は、アメリカ、ボストン美術館と東京藝術大学の2つのコレクションを合わせる「ダブル・インパクト」によって、19世紀後半から始まる日本と西洋との双向向的な影響関係を再検討した展覧会である。

これまで日本人がいかに西洋から衝撃を受けたかについては多く語られてきたものの、西洋人が日本からどのような衝撃(ジャバニーズ・インパクト)を受けたかについては、いわゆるジャボニズムという範囲でしか語られてきていない。しかし、実際に幕末明治期に日本を訪れた西洋人々は、驚きのまなざしをもって、そこに暮らす日本人と同時代の日本美術とを発見し、紹介していた。本展で展示した東京藝術大学のコレクションはウェスタン・インパクトの象徴、ボストン美術館の近代コレクションはジャバニーズ・インパクトの象徴とみることができる。この2つのコレクションを合わせることによってあらわれる、「明治ニッポンの美」の歩みを紹介した。

2. [6.2-7.26]

「ヘレン・シャルフベック
—魂のまなざし」



6月2日から7月26日まで、本学大学美術館3階展示室にて、「ヘレン・シャルフベック — 魂のまなざし」が開催された。シャルフベック(1862-1946)はフィンランドを代表する画家であり、2012年には生誕150周年を記念する大回顧展が、フィンランド国立アテネウム美術館で開催され、近年、世界的に注目される画家の一人となっているが、日本で大規模な個展が開催されるのは本展が初めて。

シャルフベックは、3歳のときに事故で左足が不自由になったが、11歳で絵の才能を見いだされ、後に奨学金を獲得し憧れのパリに渡る。パリでは、マネやセザンヌ、ホイッスラーといった画家たちから強い影響を受けた。フィンランドに帰国後は母親の介護をしながらヘルシンキ近郊の街で絵画制作を続け、自分のスタイルを開拓した。

本展では、5つのセクションでシャルフベックの全貌に迫り、19世紀末から20世紀初めに活躍し、死ぬまで一人の画家であり続けようとした女性画家の魂の軌跡を大規模に紹介した。

3. [7.22-9.13]

「うらめしや～、冥途のみやげ」展
一全生庵・三遊亭圓朝 幽霊画
コレクションを中心に一



東京・谷中の全生庵(ぜんじょうあん)には怪談を得意とした明治の斬家三遊亭圓朝(天保10—明治33[1839-1900])ゆかりの幽霊画50幅が所蔵されている。本学大学美術館では、この圓朝コレクションを中心として、日本美術史における「うらみ」の表現をたどる展覧会、「うらめしや～、冥途のみやげ」展一全生庵・三遊亭圓朝 幽霊画コレクションを中心に一を7月22日から9月13日まで開催した。

この展覧会では幽霊画に見られる「怨念」や「心残り」といった人間の底知れぬ感情に注目し、さらに錦絵や近代日本画、能面などに「うらみ」の表現を探った。円山応挙、長沢蘆雪(ろせつ)、曾我蕭白(しょうはく)、浮世絵の歌川国芳、葛飾北斎、近代の河鍋暁斎(きょうさい)、月岡芳年、上村松園など、美術史に名をはせた画家たちによる最恐の「うらみ」の競演となった。

4. [10.17-11.23]

「武器をアートに
モザンビークにおける平和構築」



モザンビーク共和国は、南部アフリカに位置する、インド洋に面した人口2500万人ほどの国。モザンビークでは、1975年の独立以来1992年まで続いた内戦のために外国から大量の武器が供給され、戦争終結後も住民のもとに残された。1995年、この武器を農具や自転車と交換し、武装解除を進める「銃を鍼に」というプロジェクトが開始される。人々の手元にあった武器は、鍼や鋸、自転車、ミシンなどの生活用具と交換されて平和な生活の助けとなり、一方回収された武器は細断され、アーティストの手によって作品に生まれ変わることになった。

本学大学美術館では、10月17日から11月23日まで、「武器をアートにモザンビークにおける平和構築」展を開催した。本展では、国立民族学博物館が収集した作品と、「銃を鍼に」のプロ

ジェクトを支援してきたNPO法人えひめグローバルネットワークが所蔵する作品を展示し、アートに結実した平和構築の営みを紹介した。

5. [11.10-11.29]

「藝大コレクション展 美の収穫祭
特集展示
平櫛田中ゆかりの作品を中心に」



11月10日から11月29日まで開催された、「藝大コレクション展 美の収穫祭 特集展示 平櫛田中ゆかりの作品を中心に」では、「美の収穫祭」と題し、尾形光琳《横楓図屏風》(まきかえでびょうぶ)や高橋由一の《鮎》など、実りの情景や多彩に変化する秋の色模様を表現した作品を紹介した。また、特集展示として、平櫛田中(ひらくしでんちゅう・1872-1979)ゆかりの作品を展覧。平櫛田中は、100歳を超えて現役の作家として活躍した、日本彫刻界を代表する木彫家の一人である。1944年以降本学で教鞭をとった縁から、本学には田中本人から数回にわたり寄贈された、自作を含む近代彫刻のコレクション計149件が収蔵されている。収集家田中の眼を通した本コレクションの中から、近代彫刻の名品を紹介した。

6. [12.1-12.6]

「藤田嗣治
『舞踏会の前』修復完成披露展
『藤田嗣治資料』公開展示」



「素晴らしい乳白色の下地」といえば、1920年代の藤田嗣治を象徴する代名词である。この時代にあって、藤田自身渾身の心会作と位置づけ、愛して止まなかった代表作《舞踏会の前》が、倉敷の大原美術館にあることはあまり知られていない。東京藝術大学では昨年来、BNPパリバ・グループのご支援のもと、本作の修復を進めてきた。修復が完了し、作品本来の魅力を取りもどした本作の完成報告・披露展が、東京藝術大学美術館展示室2において、12月1日から12月6日まで開催された。展覧会では、本作が1920年代の代表作であることを広く紹介するとともに、東京美術学校時代に描かれたと

思われる新出の《父の像》(個人蔵)の展示も行った。

また講接待会場では、本学所蔵の「藤田嗣治資料」を公開・展示した。この資料は、藤田嗣治夫人である Kimiko FOUJIJA(藤田君代)氏のもとに残された遺品で、2010年に本学に一括寄贈されたもの。約6000件に及ぶ資料は、藤田の生涯と創作活動を明らかにするための貴重な一次資料であり、今後多くの方に活用され、幅広い研究に役立つことを願っている。

SOGAKUDO

1. [5.9]

「藝大プロジェクト 2015
『ゲーテ～人とその時代』第1回
『『ファウスト』ことはじめ』



音楽学部各専攻の壁、さらには美術学部との境界をも取り払って、1つのテーマを追求する「藝大プロジェクト」シリーズ。2015年度はドイツの文豪、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテをテーマに、4回の演奏会が開催された。その第1回では、ゲーテの代表作『ファウスト』の池内紀訳の朗誦をベースに、グノーのオペラをはじめ『ファウスト』につけられた様々な音楽、さらに画家、山本容子さんとドグラクロワが『ファウスト』のために描いた新旧の挿絵も投影し、物語の立体的な再構成を試みた。

2. [7.4]

「藝大とあそぼう『邦楽のお作法』



「藝大とあそぼう」は子どもたちとそのファミリーを対象に、音楽との楽しい出会いの場を提供することをコンセプトにしたコンサート。2014年度から新しいシリーズとして様々なジャンルの音楽を取り上げ、その魅力を再発見してもらう企画をスタートさせた。初年度のオーケストラに続いて、今回は邦楽科の全面的協力のもと、子どもたちにはまだまだなじみの薄い邦楽を取り上げた。会場の子どもたちは、下座音楽の音当てクイズや、日本舞踊の体

験レッスンにチャレンジするなど、楽しい一日を過ごした。

3. [12.5-12.6]

「藝大アーツ・スペシャル 2015
障がいとアーツ」



12月初旬の恒例イベントとなった「障がいとアーツ」が2日間にわたって開催された。今回から、センター・オブ・イノベーション(COI)の「障がいと表現」研究グループも加わり、ヤマハ株式会社研究開発部との連携により自動伴奏ピアノを開発するなど、最新の技術を応用した障がい者の芸術表現の可能性が追求された。また、毎年アジアの諸地域から障がいを持ったアーティストをお招きしているが、今回はカンボジアのチャバイという民族楽器の名手が、その妙技を披露した。

4. [11.28]

「信時潔没後50周年記念
『海道東征』演奏会」

2015年は《海ゆかば》の作曲家、信時潔(1887-1965)の没後50年に当たる。信時は東京音楽学校時代に教授を務め、現在の東京藝術大学音楽学部作曲科の創設に深く関わった人物であり、その代表作である交響曲《海道東征》その他の、声楽科の教授陣をソリストに迎え、湯浅卓雄指揮の学生オーケストラとコーラスによって演奏された。この曲は1940年、「東京音楽学校紀元二千六百年奉祝演奏会」で、まさに当時の学生・教員たちによって旧奏楽堂で初演されたもので、それから75年の時を経ての学生たちによる蘇演は、その意味でも極めて意義深い演奏会であった。またこの日の演奏はライブ録音され、ナクソス・ジャパンから「日本作曲家選輯・東京藝術大学編」の第2弾としてCD発売されることが決まっている。

2015年2月1日(日)	藝大定期室内楽 第41回 第2日	611
2月11日(水・祝)	東京藝大チェンバーオーケストラ 第24回定期演奏会	612
2月19日(木)	モーニングコンサート第13回 西あゆみ(Sop)、戸原直(Vn)	761
4月11日(土)	同声会新人演奏会 第1部(夜通し券)	476
4月11日(土)	同声会新人演奏会 第2部(夜通し券)	590
4月17日(金)	藝大フィルハーモニア定期 新卒業生紹介演奏会(藝大定期第368回)	910
4月24日(金)	藝大21創造の杜2015「藝大現代音楽のタペ」	408
4月30日(木)	モーニングコンサート第1回 庄司雄大(Hr)、大澤愛衣子(Vn)	759
5月9日(土)	「ゲーテ～人とその時代」第1回「ファウスト」ことはじめ	441
5月14日(木)	モーニングコンサート第2回 吉田陽香(Fg)、佐藤元洋(Pf)	811
5月21日(木)	モーニングコンサート第3回 向井航(作曲)、奥村志緒美(Pf)	469
5月22日(金)	管打楽器シリーズ2015「ベルリン・フィル首席トロンボーン奏者 オラフ・オットを迎えて」	719
5月24日(日)	ピアノ・シリーズ2015「音楽の至宝」Vol.3 ブラームス 室内楽のよろこび 第1回	533
5月28日(木)	モーニングコンサート第4回 山下純平(Trb)、岸本萌乃加(Vn)	636
5月28日(木)	第52回藝術学生オーケストラ(藝大定期第369回)	572
6月6日(土)	「ゲーテ～人とその時代」第2回 ゲーテと音楽仲間	398
6月7日(日)	ピアノ・シリーズ「音楽の至宝」Vol.3 ブラームス 室内楽のよろこび 第2回	580
6月13日(土)	藝大フィルハーモニア定期(藝大定期第370回)	504
6月18日(木)	モーニングコンサート第5回 小宮知久(作曲)、鈴木鞠奈(Pf)	504
6月20日(土)	東京藝大チェンバーオーケストラ 第25回定期演奏会	463
6月25日(木)	モーニングコンサート第6回 大西幸生(Ob)、三雲はるな(Vn)	600
7月2日(木)	モーニングコンサート第7回 石坂真帆(作曲)、高倉圭吾(Pf)	855
7月4日(土)	藝大21 藝大とあそぼう2015「邦楽のお作法～邦楽と友達になろう！」	451
7月7日(火)	シモン・ゴールドベルク メモリアル・コンサート	709
7月9日(木)	モーニングコンサート第8回 沼田理穂子(作曲)、坪井夏美(Vn)	586
7月9日(木)	ベルリン・フィル首席クラリネット奏者 ヴェンツエル・フックスを迎えて	702
7月23日(木)	モーニングコンサート第9回 松原みなみ(Sop)、福本有彩(Vc)	619
7月25日(土)	藝大21時の響き ジャズin藝大2015～ジャズとロックとフュージョンと	897
9月9日(水)	モーニングコンサート第10回 紀野洋孝(Ten)、木村理佐(Org)	421
9月11日(金)	藝大21 和樂の美 邦楽絵巻「ヒミコ」	563
10月3日(土)	藝大オペラ定期 第61回 第1日	847
10月4日(日)	藝大オペラ定期 第61回 第2日	872
10月17日(土)	管打楽器シリーズ2015 名手で聴くバロック音楽「オール協奏曲プログラム」	545
10月25日(日)	「ゲーテ～人とその時代」第3回恋するゲーテ～恋愛巡録と創作	418
10月30日(金)	藝大フィルハーモニア定期(藝大定期第371回)「オール・バルトーク・プログラム」	587
10月31日(土)	弦楽シリーズ2015 フランスの名手たち「フォーレとドビュッシー」	731
11月7日(土)	うたシリーズ2015山田耕筰没後50年	836
11月8日(日)	ピアノ・シリーズ「音楽の至宝」Vol.3 ブラームス 室内楽のよろこび 第3回	559
11月12日(木)	モーニングコンサート第11回 金井麻理(Per)、柴垣健一(Pf)	753
11月14日(土)	第53回東京藝大シンフォニーオーケストラ(藝大定期第372回)+藝大プロジェクト2015	741
11月21日(土)	藝大フィルハーモニア・合唱定期(藝大定期第373回)	974
11月23日(月・祝)	藝大定期吹奏楽第81回	1,072
11月26日(木)	モーニングコンサート第12回 織川愛梨(Fl)、齋藤 浩緒(Vn)	801
11月28日(土)	信時潔没後50周年記念演奏会「海道東征」	914
11月29日(日)	ピアノ・シリーズ「音楽の至宝」Vol.3 ブラームス 室内楽のよろこび 第4回	718
12月2日(水)	邦楽定期演奏会第82回	950
2016年1月22日(金)	フィリップ・ミュレールを迎えて	400
2月6日(土)	藝大定期室内楽 第42回 第1日	498
2月7日(日)	藝大定期室内楽 第42回 第2日	369
2月11日(木・祝)	東京藝大チェンバーオーケストラ 第26回定期演奏会	1002
2月18日(木)	モーニングコンサート第13回 荒木奏美(Ob)、リード希亞奈(Pf)	1033
2月21日(日)	上野の森オルガンシリーズ マックス・レーガー没後100年を記念して	346

「藝大通信」編集部では、皆様からのご意見・ご感想などをお待ちしています。

今号の内容についてのご感想や、今後のご要望などありましたら、こちらまでお寄せください。

〒110-8714

東京都台東区上野公園12-8

東京藝術大学総務課内 藝大通信編集部

FAX: 03-5685-7760

E-mail: toiwase@ml.geidai.ac.jp

編集後記

「藝大通信」30号から大幅な衣替えをし、これまでとは異なる角度から、雑誌に相応しい価値のある情報を提供しようと試みています。「特集」においては、いま学的にお伝えすべきメッセージとして、各科で積極的に進められている「スーパーグローバル」の様子を取り上げています。「教員は語る」では、楽理科の土田先生と作曲科の小鏡治先生が、学生時代に共通の講義を受講されたことをきっかけに、科をまたいでおつき合いが始まり、現代の教育のあり方や音楽学論にいたるまで話が広がって、心躍る内容になっています。

展覧会・演奏会の最新情報は、東京藝術大学公式 Web サイト (<http://www.geidai.ac.jp/>) をご覧ください。

展覧会についてのお問い合わせ先

- ・ 東京藝術大学大学美術館
Tel. 03-5777-8600
(NTTハローダイヤル)

演奏会についてのお問い合わせ先

- ・ 東京藝術大学演奏藝術センター
Tel. 050-5525-2300

演奏会チケットの取り扱い

- ・ 東京藝術大学生活協同組合
Tel. 03-3828-5669
(※2015.4.1(水)より、店頭販売のみ)
- ・ ヴォートル・チケットセンター
Tel. 03-5355-1280
- ・ 東京文化会館チケットサービス
Tel. 03-5685-0650
- ・ チケットぴあ
Tel. 0570-02-9999
(一部携帯電話・PHS・IP電話はご利用いただくことができません)
- ・ イープラス(e+)
<http://eplus.jp/>

藝大基金寄附者ご芳名 [2015.2~2016.2]

東京藝術大学基金(藝大基金)へ温かいご支援を賜りました皆様に、心より深謝申し上げます。

本号では、2015年2月から2016年1月末日までに寄附申込いただいた皆様を掲載させていただきます(掲載をご承諾いただけた方のみ)。

東京藝術大学は、皆様からのご支援により支えられています。末永くご支援・ご協力を賜りますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

宗次 徳二 様	1億円	小野 千多香 様	1万円	中橋 文夫 様	5000円	フェンディ ジャパン株式会社 様	275万円
澤和樹 様	125万円	柿沼 誠 様	1万円	仁尾 さと子 様	5000円	株式会社ミロク情報サービス 様	100万円
伊藤 美佐子 様	100万円	重松 隆宏 様	1万円	三上 一郎 様	5000円	クリエイト・ジャパン株式会社 様	50万円
村尾 信尚 様	100万円	柴田 暖 様	1万円	村上 亜紀子 様	5000円	中川特殊鋼株式会社 様	20万円
高橋 郁夫 様	40万円	清水 芳男 様	1万円	今成 秀延 様	2000円	株式会社ライブ・マーケティング 様	20万円
小田島 雅子 様	30万円	下田 貴美子 様	1万円	白井 國江 様	2000円	有限会社アイ・ピー・エス 様	10万円
子安 真一 様	30万円	鈴木 一美 様	1万円	北岡 涼子 様	1000円		
野澤 篤 様	30万円	隅修三 様	1万円	飯澤 雅史 様	—	有限会社相澤電気商会 様	
花柳 寛 様	30万円	芹澤 正志 様	1万円	石田 義雄 様	—	鎌田醤油株式会社 様	
日原 徹 様	30万円	田井 順之 様	1万円	磯貝 紀枝 様	—	株式会社スタートトウデイ 様	
牧山 康枝 様	30万円	田尾 繁 様	1万円	内田 正巳 様	—		
箭内 克俊 様	30万円	高橋 荣子 様	1万円	遠藤 なるお 様	—	*「—」表示は、ご本人の申し出により公表を控えさせていただきます。	
宇野 俊哉 様	10万円	詫摩 武裕 様	1万円	大森 啓之 様	—		
中村 信喬 様	10万円	田所 厚一郎 様	1万円	岡 高生 様	—	お問い合わせは総務課渉外事業企画室 : 050-5525-2400	
西川 こずえ 様	10万円	田所 貢子 様	1万円	岡田 豊 様	—	藝大基金 WEB サイト : http://fund.geidai.ac.jp/	
阿部 光浩 様	5万円	津上 智実 様	1万円	小川 崇 様	—		
富澤 儀一 様	5万円	富永 嘉文 様	1万円	小田 滋 様	—		
若木 邦彦 様	5万円	中谷 茂次 様	1万円	香取 道雄 様	—		
渡邊 幸夫 様	5万円	中屋 文章 様	1万円	京 増久夫 様	—		
上原 修 様	3万円	長谷川 克枝 様	1万円	栗林 理人 様	—		
金澤 初生 様	3万円	花崎 一治 様	1万円	斎藤 真理子 様	—		
黒坂 隆 様	3万円	針塚 遼 様	1万円	笛平 欣司 様	—		
十一みつ子 様	3万円	藤田 育夫 様	1万円	清水 晴雄 様	—		
前川 真理 様	3万円	藤村 美恵子 様	1万円	高橋 道弘 様	—		
山崎 和子 様	3万円	細谷 昌平 様	1万円	谷口 久美 様	—		
石黒 秀子 様	2万円	前田 周一 様	1万円	辻角 祐子 様	—		
岩城 本臣 様	2万円	三浦 春政 様	1万円	都留 康子 様	—		
増田 誠一 様	2万円	三井 宣子 様	1万円	中山 靖子 様	—		
安井 君子 様	2万円	三吉 浩樹 様	1万円	新居 浩 様	—		
堤 栄二 様	1万5千円	村上 徳子 様	1万円	野田 卓 様	—		
青木 重 様	1万円	村山 則子 様	1万円	樋口 泰子 様	—		
秋山 実 様	1万円	望月 寛 様	1万円	堀田 剛生 様	—		
阿部 まさえ 様	1万円	矢代 一雄 様	1万円	牧野 英一郎 様	—		
有坂 恵美子 様	1万円	矢野 弾 様	1万円	松島 宏充 様	—		
上原 昇 様	1万円	河村 三智 様	5000円	松山 直 様	—		
岡本 達三 様	1万円	清本 和子 様	5000円	安原 和子 様	—		
小川 準子 様	1万円	瀧澤 純子 様	5000円	粂 美智子 様	—		

東京藝術大学美術館本館 2015年2月～2016年1月 来館者数報告

4月4日(土)～5月17日(日)	ボストン美術館×東京藝術大学 ダブル・インパクト 明治ニッポンの美	41056
6月2日(火)～7月26日(日)	ヘレン・シャルフベック—魂のまなざし	48098
7月22日(水)～9月13日(日)	うらめしや～、冥途のみやげ—全生庵・三遊亭圓朝幽靈画コレクションを中心に—	68139
10月17日(土)～11月23日(月・祝)	武器をアートに—モザンビークにおける平和構築	9615
11月10日(火)～11月29日(日)	藝大コレクション展 美の収穫祭 特集展示 平櫛田中ゆかりの作品を中心に	4582
12月1日(火)～12月6日(日)	「藤田嗣治資料」公開展示、「藤田嗣治《舞蹈会の前》修復完成披露展」	5532
12月15日(火)～12月24日(木)	東京藝術大学美術研究科 博士審査展	5722
1月26日(火)～1月31日(日)	第64回 東京藝術大学卒業・修了作品展	17437